
虚無の王

上月海斗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無の王

【Nコード】

N1520K

【作者名】

上月海斗

【あらすじ】

都市伝説の様に言われていた地球滅亡の危機。

それが現実のものとなった時、人々はそれを『終焉』と呼んだ。

そして、『終焉』の前日。

終焉に向けて恋人と過ごす主人公・浅葱翔流。

穏やかな最期を迎えるはずだった二人の前に、突然異界の者が現れる。

彼は翔流の事を守護兵と呼び、恋人の事を魔王と呼び、翔流の幼馴染を敵視していた。

そして、幼馴染から明かされる衝撃の事実。

明かされる『終焉』の謎。それを聞いて翔流の出した決断は……

よほどの事がない限り、毎週金曜日に更新＋気が向いたときに更新

ブログ 『終焉』（前書き）

初めまして。上月海斗と申します。

このたび数年ぶりに執筆しようと思い、投稿させていただきました。表現力が足りないのは、単に私のレベルが低いからです。

かなりご都合主義なところもあると思いますがどうかよろしくお願い致します。

また、この小説がお気に入りの作家さんの続きができるまでの時間潰しになってくれれば幸いですと思います。

プロローグ 『終焉』

「これより私が語るのは、虚無の王として語られた、エルドルガ国の王の物語である」

バーのホールに響く老婆の声。黒いローブを頭から深くかぶり、その表情は伺えないが、その声は愉悦と誇りにあふれていた。

老婆は手に持っていた本をページだけ捲る。

「物語は今から千年程前、アズラベルとダーゼルムの争いから始まる」

老婆は、まるでその時の事を噛み締めるかのようにゆっくりと物語を紡いでいく。

そう、一つ一つを思い出すかのようにゆっくりと……。

暗澹の空が、世界を覆う。

吹き荒れる風、瓦礫の山。煤混じりの雨が世界を濡らす。

横殴りに吹き付ける漆黒の雨。まるで世界の終りのようだった。

「畜生！ 俺にもっと力があれば」

慟哭。

そこには、二人の青年が居た。

一人は横たわり、もう一人はその青年を守るように見守っていた。横たわる青年から流れる、夥しい血。そして、その腹部には剣が刺されていた。

「……アレス」

小さく呟かれた言葉。それに応えるようにアレスと呼ばれた青年は、横たわる青年の手を握る。

「ああ、ここだ。俺はここにいて、ハル」

「……よかった。俺は、アズラベルを救えたのかな？ 本当に、あれでよかったのかな？」

消えそうな言葉。その言葉が紡がれるのも時間の問題だろう。それほどまでに致命傷とも言っているほどの傷。間もなく命の灯は消えるであろう。

「ああ、お前は良くやったよ。お前が居なければアズラベルは滅んでいた。お前が、ダルクスと戦わなければ間違いなくこのアズラベルの国は滅んでいたよ」

震える声。絞り出すように紡がれた言葉は、ハルを安堵させる。

「……でも、倒せなかったんだ。ダルクスは思念体になって未来へ逃げた」

「ああ」

アレスの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

「泣くなよ、アレス」

弱々しい声。だが、その声には芯がある。真っ直ぐな眼差し。

「……だつてさあ。……何でハルなんだよ。何で、魔王を倒すのがハルなんだよ！ 他の誰かでもよかったじゃないか！ 自分の魂とダルクスの魂の一部を融合させるなんて」

そう、彼の腹部に刺さった剣は自分で刺したものだ。つまりは自害したのである。

魂の融合。その為には、自分の肉体が邪魔だったのだ。

「馬鹿野郎。それが国を制する者の吐くセリフかよ。お前は踏ん返り返つて俺達に命令すればいいんだよ」

最後の憎まれ口。

「わかつてるよ。……でもさ」

「馬鹿げてるよな、自分でもそう思うよ。でも、そうするしかないったんだ。ダルクスはいつか絶対に転生をする。だけど、それがいつになるかはわからない。もしかしたらこの世界じゃないかもしれない。だから魂を融合させたんだ。あいつが転生する時に俺も転生できるように。けじめはちゃんとつけるさ。それがいつになるかはわからないけどな。その時はまた力を貸してくれよな、アレス」

そう言つてハルは瞳を閉じる。

「ああ、絶対に転生したお前を見つけ出してやるよ」

「ああ。……じゃあな。精霊王アレス」

「じゃあな。大賢者ハルト」

交わされた挨拶。この言葉を最後に一つの命の炎は消えた。

「よう！ みんな！ 終末は如何お過ごしかな？」

ラジオからDJの軽い声が流れる。だがBGMは無い。純粹に声だけを届けているラジオ。

「はっはっは〜！ ついに終焉まであと一日になっちまったなあ。ついに、このラジオの製作スタッフも俺たちだけになっちまった！ でも、俺たちは最後まで皆に声を届けるぜ！ どうせどこに逃げたって終焉はやってくるんだしな」

なんとも見上げたプロ根性とも言うのか。だがその通りだった。例え、どこに逃げてても終焉は迎えるのだ。それが例え核シエルターに逃げ込んだとしてもそれは変わりのない事だ。

「……終焉か」

ラジオに耳を傾けながら少年は呟いた。
終焉。

それは、政府が発表したものだ。
まるで都市伝説の様に言われていた地球消滅の危機。

『二〇五八年十二月八日、四〇〇キロメートルクラスの小惑星衝突により地球は滅亡する』

一年前、それはアメリカ政府の発表により、現実化するという。
現在地球の技術では、とても回避できないらしい。そもそも地球にまだ恐竜が居た時代、地球の全生物の七割を死滅させた隕石でさえ約十キロメートルだ。地球が滅亡するのに必要な隕石の幅は二十キロメートルもあれば十分だという。
今回落ちてくる隕石は、約四〇〇キロメートル。確実にそれは『終焉』と呼ぶ事ができた。

「……おきてるの？ 翔流」
「わりい、起しちまったか？」

刹那、蛍光灯の光が室内を照らす。

部屋の中には二人。少年と少女がシングルのベッドで横になっていた。

少女の手にはリモコンが握られていた。少女が部屋の電気を点けたのだ。

「いいよ、別に……うわっ、もう十一時じゃん」

ベッドの横に置いてある時計を一瞥した少女が、ため息をついた。

「起きてたのなら起してくれてよかったのに」

少女の非難に少年は苦笑で答えた。

「……何か気持ちよさそうに寝てるからさ、そのまま起こさないようにしてたんだ」

少年の名前は浅葱翔流。あさぎかける

線の整った顔立ちと、小柄だが、華奢と思わせない引き締まった筋

肉。幼い頃から続けている空手で培ったものだ。そして、人の目を引く彼の最大の特徴である、染色では出す事のできない赤茶けた髪の毛の色と同色の瞳。三年ほど前、事故により瀕死の重傷を負い、その日を境に徐々に変化していったのだ。本人曰く、染める手間が省けて良いと漏らしている。

「いつから起きてたの？」

そして、少女の名は、みつかさちせり深司千芹。

童顔で柔らかい印象を与える輪郭。すらりと伸びた足に、引き締まったウエストが胸の丸みを強調させている。そして、真紅の瞳と真っ直ぐに伸びた紅い髪。翔流とは違い千芹は、最初から紅い瞳と同色の髪を持って生まれた。昔は、その事がコンプレックスだったが、今は実は気に入っている。

燃えるような紅髪と、純白の様な白い肌。その対比は、少女をより幻想的なものに変えていた。

「確か八時頃かな？　なんか寝てるのが勿体なくてさ」

ラジオのスイッチを切り呟く。あと数時間後には、世界は終焉を迎える。そのような気持ちになるのは当然の事だろう。実は、これは夢でしただなんて展開を何度となく期待した事だろう。だが、それは月日が流れていくにつれ、明確なものになっていき、『終焉』はついに明日と迫っていた。

「……何か損した気分」

不貞腐れる千芹。子供の様に頬を膨らませる。幼い頃からずっと見てきた千芹の悪癖。子供の様な仕草が翔流の悪戯心を掻き立てる。

「へへ、俺は千芹の寝顔を堪能できたし問題なし！」
「ずるいよ、翔流だけ」

不貞腐れていた千芹が、不意に翔流を覆いかぶさるように押し倒す。

「……ずるいよ」

首に回された手。塞ぐように合わさる唇。伝わる温もり。数秒後、ゆつくりと唇が離れていく。

「これで許してあげる。それとも、このままエッチする？」

悪戯っぽく笑う千芹。どうやら悪戯心が逆手に取られてしまったらしい。翔流は千芹の頭にそつと手を置き、そつとなでる。くすぐったいのか千芹はそつと目を細めた。

「それも良いな」

「……翔流」

呟き、細めていた目を翔流から外す。照れ隠しなのだろう。いつも通りの恋人同士の日常。

雰囲気も最高潮に達し、今度は翔流が千芹を抱きしめる。だが、その瞬間に翔流の腹が鳴いた。

「……」

「……」

雰囲気を全力でぶち壊した腹の虫に、千芹が小さく微笑む。

「おなか、すいたよね。私、何か作るよ。最後なんだし食材も余っ

たら勿体ないしね」

そう言って千芹は、ベッドから降りる。白いYシャツを一枚だけ羽織るその姿は、翔流の理性を揺さぶるには充分過ぎるほどの破壊力を持っていたが、再び腹の虫が鳴く。どうやら、性欲は空腹には勝てなかったらしい。性欲と食欲は、同時にはおきないとはよく言ったものだ。

「待つて、千芹。一緒に作ろう」

三度鳴る腹の虫を聞き、翔流はベッドを降りた。

——数十分後。

テーブルに並べた料理の数々。カルボナーラ、サラダ、バタートーストにコーンスープ。既に朝食というよりも昼食といってもいい時間なので、差し詰めランチといった感じで昼食と出されても違和感のないラインナップ。個々の料理から発する匂いが食欲をそそる。

「「いただきます」」

礼儀良く一礼をして食事を始める。

「うん、おいしい」

フォークにカルボナーラを巻きつけ、口に運んだ千芹が笑みをこぼす。

「そうだな」

「そういえば、昨日翔流が寝た後にお母さん達からメール来たよ。今、グランドキャニオンに居るんだって。終焉はグランドキャニオ

ンで過ごすってさ」

携帯を操作する千芹。空中にホログラムが投射され一枚の写真が映し出される。其処には赤茶けた大地に、笑顔で写る四人の中年が居た。翔流と千芹の両親だ。

翔流と千芹は、家が隣で俗に言う幼馴染という間柄だった。両親も学生時代からの付き合いだったらしく、家族ぐるみと言うのは昔から多々あった。

そして、それは二人が付き合うようになってからも変わることは無く、現在にいたっている。

「そっか」

終焉から逃れる術は無い。それは、わかっている事だ。それでも逃げる人間もいる。だが、それと同時に終焉を迎える場所を探す人間も少なくは無い。翔流と千芹の両親もその中に含まれている。もしかしたら、最後ぐらいはと翔流たちに氣を使ってくれたのかもしれない。

「また、凄い所をえらんだな」

苦笑する翔流。

「……まあ、私は翔流と終焉を迎えられればそれでいいかな」

「そうだな、俺もそうしたい」

ゆつたりとした時間。心地よい空気が二人を包む。

だがその空気は、場違いな音によって消滅した。

聞きなれた電子音。テーブルの横に置いてある携帯に着信が入ったのだ。

液晶にはハルと書かれている。

「誰？」

「うん、ハルだ。ちょっと待ってて」

フォークを口に咥え携帯を操作する。

刹那、ホログラムが投射され空間に一人の少年の姿が映し出された。

『よう！ 翔流……と、やっぱり千芹も一緒か』

ホログラムの少年はニヤニヤしながら応える。

「何だよ、ハル。俺達、今食事中なんだけど」

『お、旨そうじゃん。千芹の手料理？ 俺も食いてえ』

「残念、ハル君にはあげないよおだ」

そう言って千芹は、料理を隠すジェスチャーをする。

『ケチ』

「何とでも言ってよ」

そう言っつて千芹はカルボナーラを口に運んだ。

『はいはい。まあ、冗談はこれぐらいにして、二人ともちょっとこれから出てこれないか？』

「どうした？」

『ああ。あのさ、二年前に埋めたタイムカプセルって覚えてるか？』

「ああ、中学の桜の木の下だろ？」

『二年しかたつてなくて開けるのもカッコ悪いかもしれないけどさ、

事情が事情だし、今から掘りに行かないか？」

「梓と樹は？」

『ああ、来るって。後は、お前らだけだよ』

「そうか」

翔流は千芹の方をチラッと見る。うなずく千芹。

「分かった。場所は、現地集合でいいのか？」

『おう、じゃあ岸中で待ってるぜ』

「あいよ」

翔流の返事を聞いたか聞かないかぐらいで通信が切れた。それと同時にホログラムも消える。

「ったく、タイミングの悪い奴だ」

「ふふ、そうだね」

二人で料理にラップをかけ部屋を後にした。

街を疾走する一台のバイク。

街は閑散としていて普段は目立たないモーター音が一定の音を発している。

『化石燃料禁止法』が出来て十年。内燃機構の乗り物は禁止され、この国の乗り物は電動へと変わった。

モーターの著しい進化。エンジンが小型で出力も高いと言われていたのは、もう数十年前だ。今じゃ、モーターでも何の申し分もないぐらい小型で馬力もある。そのことが拍車をかけそんな法律が出来る上だったのだろう。

ネイキツドのバイクを巧みに操る翔流と、タンデムシートに跨り、翔流にしがみ付く千芹。

バイクのホログラムパネルの時計を見る翔流。時間は、午後一時を示している。

その割には暗い。太陽の光すら通さない厚い雲の所為だ。この世界が、闇に包まれてから三日。専門家は、隕石の影響だと言っている。

「懐かしいね」

「ああ、そうだな」

流れる景色。住宅街から大通りへ。いま二人が疾走している道が、三年間通い詰めた私立岸谷中学への通学路なのだ。

そしてバイクを走らせる事、五分。目的地へと到着する。

「いよう！ 待ってたぜ、お二人さん」

金髪の少年が金属製のスコップを片手に手を挙げる。恐らく用務倉庫から拝借してきたのだろう。

「ハル君久しぶり〜！」

バイクから降りた千芹がハルと呼ばれた少年に駆け寄る。

穂純^{ほすみ}ハル。それが、この少年の名前だ。金髪にピアス、まだ幼さが残る顔立ちには少しアンバランスにも思える。そのアンバランスは良くも悪くも目立っていた。

「よう！ ハル。相変わらず金髪にしてるんだな」

バイクのスタンドを立て、翔流も二人の所に駆け寄った。

「へっへ〜！ かつこいい？」

ビシッとポーズをとるハル。

「ハル。……成長しねえな」

「……十分間、鏡の中の自分を見てからそのセリフを言ってみようか」

「うわ〜。俺って超愛されてる」

呆れた二人の突っ込みを、ポジティブに受け取るハル。三人にとってはこれが挨拶のようなものだ。元々、ハルと翔流と千芹は幼い頃からずっと一緒に過ごしてきた。よく三人組で括られる事が多い、俗に言う幼馴染だ。中学に上がり翔流と千芹が恋仲となると、ハルは二人から少し距離を置くようになった。だが、こうして三人がそろえば、いつもの様に幼馴染の三人に戻るのだ。

「で？ 皆は？」

「もう桜の木の下にいるぜ」

ハルは、二人を急かすように桜の木の下へと誘導する。

「お、来たな」

翔流にかけられた声。

「おう、樹！ 久しぶりだなって、お前また身長伸びたか？」

「まあな。そういう翔流は、……何というかまた縮んだか？」

「縮むか！ 胴回し蹴りくれるぞ！」

「踵落として撃ち落としてやるよ！」

樹と呼ばれた少年の名は綾瀬樹。あやせ たつき一八〇を超える長身で、翔流と同様に幼少期から空手を習い、地方大会では翔流と五度ほど対戦している。勝敗は、二勝二敗一引き分け。

その為、顔を合わせれば何かと物騒な話も出てくる。

時には、模擬戦という名の喧嘩を申し込んだり、時には完全に喧嘩に発展したりするが、本人達に言わせればただじゃれ合っているだけなのだ。

「相変わらず翔流君とは続いでるんですか？」

ギヤーギヤーと、じゃれている樹と翔流を一瞥した少女が、からかう様に千芹に声をかける。

「えへへ、まあね」

「あらら。からかったつもりが、のろけられちゃったよ」

と、笑う。

「梓だつて樹君と付き合ってるんでしょ？」

「え？ …… なんでそれを？」

そう言つて苦笑する少女。

ポニーテールにまとめた髪と、漆黒の髪。はっきりとした目鼻立ちが活発な印象を与える。

少女の名は牧野梓。まきの あずり

中学時代は期待のスプリンターなんて言われた短距離選手だったが、高校に進学すると同時にぱつさりと陸上から縁を切った。

本人曰く、陸上は趣味でやるのが良いらしい。

「まあ、気が付いてるのは、私だけおもうけどね」
「うん。わからないようにしてたんだけどなあ」

考え込む梓。それを見て笑う千芹。千芹は、昔から直感が働く方だった。洞察力とでも言うのだろうか、物事の異変には一番最初に気がつく。

「でもさ、樹君相手だと倍率高かったんじゃない？」
「それが、そうでもないんだよ。あいつも結構鈍感だからさ……」

繰り広げられるガールズトーク。

話題は、互いの彼氏の話からスイーツの話、そして今使っている化粧水の話へと移っていく。

「……はあ。お前らここに來た目的忘れてるだろ」

鉄製のスコップを右手にぶら下げ、肩を落とすハル。

「わかってる、わかってる！ タイムカプセルを掘りにきたんだよ。……よっ！」

ハルの言葉に肯定した後、宙を舞う翔流。正確には前転宙返りの要領で、右足を鞭のように撓らせる。胴回し蹴りだ。

「ばかつ！ 本当にやる奴が……」

胴回し蹴りとは、早く言ってしまうえば変形の踵落としだ。軌道を見切った樹が体を捻り、右足を避ける。

「あるか！」

そして、そのまま体の捻りを利用し、右足を頭上高くまで上げ一気に振り下ろす。倒れこんだ翔流の鳩尾に踵落としが炸裂した。

「ぐはっ」

まさに宣言通りのフィニッシュを決めた二人。

「胴回し蹴りなんてくらうか！　って、あれ？」

足元には白目をむく翔流。そこには、悶絶を通り越し、失神している翔流の姿があった。

「まったく！　これから世界が滅びるって言うのに、バカばかりだよ！」

桜の木に凭れかかり、ティディベアのようにぐったりしている翔流を一瞥し、ハルが怨嗟の声を上げる。

「自分……武人ですから」

力なく応える翔流。千芹と梓の懸命な介抱により、意識は取り戻したが正直まだ辛そうだったので、結局タイムカプセルは、ハルと樹の二人で掘りだす事となった。

「しかし、みつからねえな。こんなに深く埋めたっけ？」

「確か一メートルぐらいしか掘らなかつた気がしたんだがな」

タイムカプセルを掘りだす時に良く陥る記憶互い。二人も例に洩れず、桜の木の前は軽く工事現場の様になっていた。最初は女性陣も穴が掘られるたびに興味を示していたが、一向に出てくる気配を見せないタイムカプセルに痺れを切らせたのか、翔流の横で談笑をしていた。

「ったく、なんかどうでもよくなってきた」

どうにも辛抱できなくなったハルが、地面にスコップを突き刺し流れる汗を拭う。広がる穴を埋める事を考えると、そろそろ出てきてもらいたいものである。

「確か、校舎側に埋めた記憶があるんだがな。もしかして誰かに掘りだされちまったかな」

「それは、勘弁してもらいたいな」

校舎に設置された時計を見ると既に三時を指している。既に、穴を掘り始めてから一時間半が経過していた。

「こりゃ、そろそろあきらめた方がいいのかもな。闇雲で思い出を探すよりも、残された時間を楽しんだ方が利口なのかもしれない」

確かにそうかもと言う声が梓から洩れる。周りも声には出さないが、周りは絶望ムードが漂っていた。

「よっ！」

木に凭れていた翔流が、反動を利用して器用に起き上がる。

「にしたって、これからどうするよ？ ファミレスなんてはもうや

ってないし、遊ぶところだってどこにもないだろうよ」

というよりも、終焉を迎える前日なのだ。コンビニですら営業していない。寧ろこんな時に仕事をしている人間が居るはずがない。

「そうだよなあ。でも、このまま穴掘ってても見つかりそうもねえしなあ」

「こう思うと遊ぶ所って意外とないもんだな」

「……まあ、な」

現代社会で『娯楽』と言う事に関しては、ほとんどの事に人の手がかかる。つまり、どんな施設でも人々の手がなければ動かない。残念な事に、現代にはそれが普通であり、人々が仕事を放棄した今、娯楽と言えば自宅でゲームをしたり読書や談笑するしかないのだ。

「公園でバスケ……は、暗くて出来ねえな」

「いつその事、終焉を珍しい場所で過ごすとか？」

梓が翔流のバイクを指さして言う。

「珍しい場所ってどこよ」

怪訝そうに聞く樹。

「うーん、富士山とか？」

「最後に山登りはちょっと嫌だな」

苦笑する千芹。

「うーん。俺も、山登りは勘弁してもらいたい。ただ、皆でツーリ

ングってというのは面白そうだけだな」

樹がポケットの中から鍵を取り出す。どうやら樹達もバイクで来たらしい。

「別にそれでも良いけどさ。目的地はどうする？」

「それは、別に走りながら決めればいいだろ」

「まあ、そうだな。樹達はバイクどこに止めてるんだ？」

「ああ、俺とハルは教員用の駐車場に止めてきたんだ」
「なるほど。じゃあ、さっさと片付けるか」

穴を埋めるという作業は、穴を掘るという作業に比べれば圧倒的に早い。三人で手分けして穴を埋めていく。別に、最後なのだから埋めなくても良い気もしたが、ハルが一言『最後ぐらいはちゃんとしていこう』という言葉に皆、賛同したのだった。

「まあ、こんなもんだろ」

スコップの背で被せた土を均す翔流。

「じゃあ、俺、スコップ片付けてくるわ。お前等バイク校門の前に回しとけよ」

「おう、悪いな」

スコップを樹とハルから受け取り用務倉庫へと足向けの翔流。

「あ、翔流！ 私も行くよ」

「おう」

翔流の隣に並ぶ千芹。その時だった。

『見つけた!』

「うん?」

不意に聞こえた声に翔流が振り向くと、その瞬間に何かが爆ぜた。
小さな爆発だった。

「千芹!」

小さな爆発とは言え、凄まじい風圧と轟音。とつさに千芹を庇い、爆発が起きた辺りを確認する。ハル、樹、梓の三人は爆発の影響を直に受けたのだろう。三人はピクリとも体を動かさない。いや、動かせないのだ。もしかしたら気絶しているのかもしれない。
そして、原因を探るために爆発した場所に目を向ける。

「……なんだよ、こいつ」

息を呑む。目を疑うような光景とでも言うのだろうか。そこに立っていたのは男だった。金色の髪と、同色の瞳。身体を覆う黒いロングコート。その下から除く剣帯、そしてそこに長剣を携えていた。だが、それ以上に目を引くものが男にはあった。なぜならその男の姿は人間とは言い難いものだからだ。人外。異形の者という言葉が適切だった。その印象を与えるのは手と耳だ。手はまるで岩を削り出した様にこつこつしていて、指先の一本一本が氷柱の様に鋭い。そして耳は人間の耳というよりも半漁人のえらの様な形をしていた。

「お迎えにあがりました。ダルクス様」

その男は一步、また一步と二人に向けて歩む。

男が一步步くごとに強まる、威圧感と重圧。張り詰める緊張。身体が竦む。まるで磔にされたように動かない手足。脳が、危険だと警告する。脈が、心音が、耳元で聞こえるような錯覚。速まる鼓動。翔流の身体すべてがこの男を拒絶していた。

「……なんだよ、あんた」

絞り出すように問いかける翔流に男は眉をひそめた。

「ほう。この髪と眼の色。まだ完全には覚醒してはいないようですが、既に守護兵殿も御創りになられたようで」

「守護兵？」

「……やはり、私を見ても記憶は戻らないのですね」

千芹の言葉に肩をすくめる男。その時だった。

「そいつに何を言っても無駄だぜ」

男の首筋に這う銀色の刃。聞きなれた声だった。幼少時代からずっと聞きなれている声。先ほどまで倒れていたはずなのに。間違うわけがない。ずっと三人で過ごしてきたのだから。だが、その姿は翔流が知っているものとは少し違っていた。金色の髪は銀色へと変化し、黒目だった瞳は碧眼へと変わっていた。

「貴様は！ 大賢者ハルト！」

「お前が千芹を狙ってここに来ることはわかっていたよ。カーン」

刹那、首筋の刀身が煌々と燃えあがる。

「千芹の記憶は俺が操った。ちよつとの事じゃ、ダルクスの記憶な

なんて目覚めないぜ。まあ、翔流が取り込まれちゃったのは誤算だったかな」

そう言つて刀身を引く。首に食い込んで行く刀身。鼻を衝く強烈な臭い。そして、絶叫。

「千芹！ 見るな！」

とつさに動いた身体。千芹を抱きしめ、視線を逸らす。血飛沫が焼け、強烈な悪臭を放つ。そして、断末魔が途絶えた後、鈍い音が聞こえた。

目の前に広がる光景。それは、まさに地獄絵図その物だった。首の無いカーンと呼ばれた男が倒れ伏せている。そしてその横には転がる首。ハルが斬り落としたのだ。

「……ハル、お前なんて事を」

すべてが理解できなかった。目の前に転がる首の無い死体。いや、それ以前に親しい間柄の友人が殺人を犯した。恐怖、悲しみ、怒り、様々な感情が頭の中を駆け巡り消えていく。そして、最後に消えずに残ったのは動揺だった。

「落ち着け、翔流！ こいつは生きてるよ！」

「そんなわけ……」

あるわけないと続ける事が出来なかった。ピクリと動く男の身体。ゆつくりと握られる掌。

だが脅威は、それだけでは終わらない。

男の身体は、再び立ち上がろうとしていた。まるでB級ホラーを見ているような気分になる。

「やっぱり、これぐらいじゃ足止めにもならねえのな。嫌だねえ、不死身は」

そう言つてハルは、カーンの体に剣を突き刺した。再び、肉の焼ける耳障りな音が響く。

「来い、翔流！ 千芹！」

剣を引き抜き、血潮を振り払う。同時に、持っていた剣が跡形もなく消えた。

「なっ……ちよっと、待てよ！ 何なんだよ！ 意味がわからねえよ！」

「話は後でたつぷりしてやる。今は俺の言つとおりに動け！」
「動けつて言つたつて、樹達はどうするんだよ！」

倒れている樹達に目を向ける。だがそこは既に蛻の殻だった。

「何で……居ない？」

「もう安全な所に運んだ。それより、早く！」

状況を飲み込めない二人を、急かす様に追い立てる。

「バイクで逃げる用意をして校門前で待っていてくれ。俺もバイクを持ってすぐに行く」

「くっ……ああ、もう！ 仕方ねえ、行くぞ千芹！」

「……うん」

半ば自棄になりながらも、ハルの言葉に従った。走りながらバイ

クのキーを取り出す。刹那、地面が揺れる。

「なんだ！」

「くそっ！ もう再生が始まりやがった」

ハルの言葉で男に視線を送ると、そこには黒く巻き上がる渦が出ていた。漆黒の竜巻。吹き荒れる疾風。そして、地の底より響き渡る雄叫び。その声に大気は震え、その場にいる者を圧倒する。

「何だよ、あの竜巻みたいなのは……」

「……翔流、あれが見えるのか」

「は？ 馬鹿にしてるのか？」

「……いや、なんでもない。急ごう」

プロローグ 大賢者と魔王（前書き）

プロローグ。意外と長いです。

プロローグが終わるまでは毎日一話ごとに、更新していきます。

それと一話を見たら鬼の様に読みづらかったので、「」の間に改行を入れました。……ページ数は増えましたけど

プロローグ 大賢者と魔王

暗闇を疾走する二台のバイク。誰も居ない街中。まるで、世界中でこの三人しかいないような錯覚さえ覚える。

「ちょっと、スピード出し過ぎだよ！」

必死でしがみついている千芹が、苦悶する。集束していく視野。限界までアクセルを絞り、操作できるギリギリの速度で疾る。もし、これがなんでもない日常であれば、即座に免停コースは免れない。だが、今は終焉の一日前。当然の事ながら警察は動いてなどいなかった。

そしてバイクを走らせる事、五分。ようやくハルがバイクを止める。

「……ここは」

そびえるビル。とはいっても、朽ち果てていて、防護シートがかけられた廃墟だ。

「ここに仲間が居るんだ……つと、お前等の魔力に結界が反応してやがる」

防護シートの切れ目からまるでオーロラのように光る壁が見えた。その壁は何かに合わせてる様に波紋を広げている。

「ちょっと待ってな」

そう言ってポケットから何かを取り出す。

「こいつを持っていてくれ」

ポケットから取り出したのは、オレンジ色に光り輝く石だった。ビー玉の様に透き通った球体、そして中心には六芒星が刻まれている。それが二つ、ハルの掌で輝いていた。恐る恐る、その石を掴み上げる翔流。同様に千芹もその石を受け取った。

「それを、絶対に手放すなよ」

防護シートを捲り、中へ這入っていくハル。そして、難なくオーロラの様な壁をすり抜ける。続けて翔流、千芹と中へ這入る。オーロラの様な壁をすり抜ける時、ザラリとした感触が身体を走り抜けた。なんとも言えない感触に少しだけ顔を顰める。

「……気持ち悪い」

同様な事を千芹も感じたのだろう。少しだけその顔色が悪かった。建物の中は閑散としていた。あるのはただ瓦礫のみ。柱からは鉄骨がむき出しになって、老朽化が進んだコンクリートは所々に剥がれ落ちている。広いエントランスが、物悲しさを増加させていた。

「よう、遅かったじゃないか。ハル」

不意にかけられた声。エントランスの中央には二人の男女が立っていた。

男の方は動きやすさを重視したのか、黒い革のジャケットとパンツ、一本に結われた金髪の髪。腰には明らかに銃刀法に引っかかる剣を携えている。そして何より、全く隙を感じさせない芯のある力強い眼が、妙な威圧感を醸し出していた。

女の方は、男とは対照的に真っ白なローブ、右手にはバカでかい寶石の様な物がついた杖を持っている。やや釣り目がちな目と、線のある顔立ち。腰まである漆黒の髪と同色の瞳。そして、何よりも印象的なのが、耳の上から小さく生えた二本の角だ。

「わりい、アレス。カーン相手に時間食っちまった」

「やっぱりカーンがきたのか。ちっ、ハルの言った通りになっちまったな」

そう言っただけでアレスと言われた男は顔を顰める。

「だが、この作戦はまだ俺達の方が有利だ。奴のお目当ては、ここにいるしな」

ハルの言葉にアレスの視線が千芹に向けられた。

「これがダルクスの成れの果てか。で？ そっちのガキは例の取り込まれちゃったっていう守護兵か？」

千芹を捉えていた視線は翔流へと流れる。視線を向けられると同時に、威圧感が纏わりつき、息が詰まる。絶対的な威圧感は、恐怖となって翔流の思考を停止させていく。

「ああ、浅葱翔流って言うってこの世界での俺の幼馴染さ。この世界じゃ俺は穂純ハルって人間だからな。ちなみに、ダルクス……いや、千芹も幼馴染だけだな」

「ふん、大賢者と魔王が幼馴染なんて笑えねえよ」

アレスが再び千芹を一瞥する。向けられた嫌悪感。そして僅かだが殺気も込められている。

「……っ」

それを感じ取った千芹が委縮する。唇を強く噛締め、その視線に耐える。張り詰める空気。沈黙がその場を支配する。

「二人ともここで殺しちまうか？」

アレスが呟く。刹那、爆発的に殺気が放たれた。少しでも気を抜けばすぐにでも飲まれてしまう気迫。

「それも……そうだな」

アレスの意見にハルが肯定する。認めたくない言葉。だがハルは確かに肯定した。

「だよ。お二人さん」

ゆっくりと腰に携えている剣を鞘から引き抜くアレス。

「……ハル、手前」

「悪く思ふなよ。翔流」

裏切られた。血の気が引いて行くのがわかる。目の前がゆっくりとブラックアウトしていく。だが腹の底から込み上げてくる怒りがそれを振り払っていった。そして、それが頂点に達する。

「ふざけんじゃねえよー!!」

慟哭。そして、気合い。怒りに任せて重圧を振り払う。血が出る

ほどに強く、堅く握られた拳。

「うおおおおー!!」

咆哮。それと同時に地面を蹴る。まるで倒れ込むかのように、地面ギリギリまで態勢を低くして拳を放つ。重さよりも速さを重視した右ストレート。というより、ボクシングで言うスマッシュに近い。超低空からの打ち上げストレート。そして、狙いは顔でも鳩尾でもない。得物を持った右手だ。相手に悟られないように視線を巧みに使い、恰も顎を狙っていると思わせながら拳を振りぬく。得物を持つて優位に立っている相手を倒す方法。それは得物を無効化する事から始まる。そして剣というのは、構造上、刀身から受ける衝撃には強くできているが、柄からの攻撃はよほどの握力がない限り、防ぐ事ができない。それに加え、目のフエイントだ。翔流の目論見は見事に決まり、柄を持った右手ごと殴り飛ばした。

「ぐあっ！」

吹き飛ぶ剣。一瞬の隙。これを見逃す手はない。体を捻り遠心力を加えた右の裏拳をこめかみに叩き込む。

「ちっ」

聞こえる舌打ち。こめかみに当たる直前で、ガードされたのだ。だがそんなものは関係ない。即座に手を引きさらに捻りを強くする。遠心力により加速したローキック。ズバンと良い音が鳴る。

「くっ」

漏れる苦悶。続く回転系の攻撃にガードを固くするアレス。だが、

それが狙い目でもあった。右回転を軸にしていた翔流の体は、これまでに生じた遠心力を効率よく力に変換していた。すべての遠心力を右手の引く力に変える。そして、すべての回転の力を右手が吸収した時、爆発的なエネルギーを含んだ正拳突きが放たれた。渾身の一撃がアレスの鳩尾に突き刺さった。

「がはっ」

膝から崩れるアレス。息も儘ならず、その場に倒れ伏せた。

「はあ……っはあっ」

倒れ伏したアレスとは対照的に肩で息をする翔流。

「おいおい、マジかよ」

驚愕するハル。

「手前も調子扱いてんじゃねえよ！」

どうやら翔流の怒りは今も進行中らしい。無理やり呼吸を整え、ハルへと突っ込んでいった。

「ちょ……待てって」

必死で制止を訴えるハルを翔流の右足が襲う。チツと言う音がして翔流の足が振り抜かれた。

「鼻……！！」

翔流のハイキックはハルの鼻を掠めた。ボタボタと垂れる鼻血。

「手前！ 動くんじゃねえ！」

「なんて無茶な事を平然と言っんだ！ 恐ろしい子！ てか、エルノアも見えてないで助ける！」

「なんで？ 自業自得じゃない」

今まで黙っていた女が冷たくハルを突き放す。

「バカっ、ここで計画失敗なんてしてみる。それこそ本末転倒だ」

ハルの声に『仕方ないわね』と呟くエルノアと呼ばれた女。
刹那、翔流の体が動かなくなる。

「な、なんだ」

まるで、糸のような物に絡めとられたような感覚が翔流を襲う。

「くそがつ！」

毒づき、力任せに突進しようとするが、腕を振り上げる事も許されない。

「落ち着け、翔流。俺達は、お前達を殺そうとはしない」

「意味わかんねえ事言ってんじゃねえよ！」

「まったく、お前は手負いの獅子か！」

ハルはそう愚痴りながら、持っていたポケットティッシュを鼻に詰め込んだ。

「おら、アレス！　いつまで寝てんだ。いい加減、起きろや！」
「……馬鹿野郎。こつちだって好きで這いつくばってんじゃねえんだよ」

ゆっくりと立ち上がるアレス。膝に力を入れるも、うまく入らないらしい。その有り様は例えるなら生まれたての小鹿と言った所か。

「いたたたた。……つたくよ。なんて奴だ」

苦痛に耐えながら、アレスが口を開いた。

「もう、試さなくっていいのか？」

「ああ。お前の術は完璧だよ。ここに居るのはダルクスって言うても誰も信じないくらいばつちり極まつてるよ。おゝ、痛え」

「当たり前だ、誰に物言ってやがる」

「悪いな二人とも。俺はアレス・レオハーツって言うんだ。アズラベルという国の国王をやっている。先ほどは不躰な態度で済まなかった。気を悪くしないでくれ」

そう言っアレスは頭を下げた。もう、先ほどまでの威圧感と殺気は消えている。それと同時に翔流の身体が自由に解放された。

「私は、エルノア・ルノアル。二人共ごめんなさいね。この二人には、後でよく言っておくから」

「……どういう事だ」

ようやく解放された身体。殺されるかもしれないという緊迫感によって生じた精神的な疲労は大きい。かろうじて紡ぐ事が出来た言葉はそれだった。

「騙すような事して悪かった。翔流、千芹。けどな、それはこれから俺が説明する事と大きく関係しているんだ」

そう言つて、ハルは空中に手を翳す。すると、先ほどの剣がハルの手に握られた。

「言つとくけど、これは手品じゃないぜ。話すと長くなるけどこれは、神術って言ふんだ。まあ、この世界で言う所の魔法だ」

「……魔法ってあの魔法？」

恐る恐る、千芹が尋ねる。どうやら千芹は未だに警戒を解く事が出来ていないらしい。当然と言えば当然だろう。だが、ハルはそのまま話を続けた。

「ああ、あの魔法と考えてもらつて間違つてはいない。翔流はさつき身をもつて体験したからわかるだろ」

「……ああ」

確かにあれは人間業じゃなかった。翔流は体格は小柄だが、効率よく力を使う方法を熟知している。その翔流を以てしても拘束されてしまったのだ。

「俺、アレス、エルノアの三人はその『魔法』が使える。それを前提に聞いてくれ。まず、翔流を除くここにいる全員がこの世界の人間じゃない。イグニリアスと言う別の空間にある世界から来た。まあ、正確には俺と千芹はこの世界の人間だが、前世の記憶と力を持つてこの世界に生まれてきた。まあ、千芹のダルクスとしての記憶は俺が封印しちまつたけどな。アレスが不躰な態度をとつたのは、ちゃんと記憶が封じられているかを確かめるテストだったんだ」

衝撃だった。だが、心の中では気が付いていた事でもある。突然の襲来、ハルの変化、不可解な現象。そのどれをとってもこの世のものとは思えないからだ。

「それでだ。まずは、あいつらがなぜ千芹を狙うのかから話して行こうか」

ハルは手にあった剣を振り払うと剣が消えた。そして、言葉を紡ぎ始める。

「イグニリアスは、今戦争中なんだ。イグニリアスには大きく分けて4つの種族がいてな。身体に神素しんそと言う魔力細胞を持つている神族と、魔素まそと言う魔力細胞をもった魔族。そして、神素と魔素を両方持ちえた龍族と、同じく神素と魔素を持ち合わせた禍族がいる。詳しい話は省くが、今戦争をしているのは、神族と魔族だ。ちなみに俺とアレスは神族で、エルノアは龍族な」

龍族という言葉聞いてエルノアの頭を見る。そこに生えている二本の角はそういう意味だったのだろう。

「今から約五〇〇年前。俺とアレスが率いる神族と、魔王が率いる魔族の戦争は熾烈を極めた。死闘の末、なんとか魔王を倒す事が出来たが魂まで滅ぼす事は出来なかったんだ。そして、その魔王が転生をした姿がお前だ。千芹」

再び、衝撃が走る。

「魔王を倒したとはいえ、戦争は今も続いている。戦況は神族の方が圧倒的に押している。そこでどうしても戦況をひっくり返したい魔族は、圧倒的な魔素を持つ魔王の存在を欲したわけだ。これが千

芹が狙われる理由だ」

「……そんな」

呟く千芹。血の気が引いている。

「次に翔流の守護兵って件だが、さっきも言った通り千芹のダルクスとしての記憶は封印することが出来た。記憶は封じる事は出来たんだが、力までは封じる事ができなかったんだ。最初は別にそれでもよかった。だが、それは間違いの始まりだったんだ」

「どういう事だ？」

「お前、千芹と付き合い始めた頃、死にかけた事あったよな」

「ああ、あの時は千芹に輸血してもらって助かったんだ」

三年前の記憶をふと思い出す。三年前、学校の帰り道。子供を助ける為にトラックに撥ねられ、瀕死の重傷を負った事がある。後から聞いた話だと、緊急で運ばれた後、千芹の血液型が翔流と同じだった為、輸血を施したと聞かされていた。

「それだよ。それがお前の取り込まれた瞬間だ。お前の髪の色と眼の色が、段々と千芹に似てきているだろ。それは、お前の中で千芹の……いや、ダルクスの魔力細胞がお前の体を侵食しているからなんだ。だからお前にも魔王並みの魔力が宿っている。言わば、魔王のレプリカってところだな。まあ、完全に侵食する前に俺の術で楔をうつたから覚醒する事はないと思うがな」

「そんな馬鹿な」

否定をするがそれはすぐにハルに打ち砕かれた。

「さっきのアレが見えたんだろ？」

アレとは先ほどカーンを中心に起きた黒い竜巻の事を言っているのだろう。

「アレはこつちの世界の人間には見えないんだよ。だがお前はそれを見た。それは、お前の身体に魔素が宿っている証拠なんだよ」

「……だからあいつは俺の事を守護兵と言ったのか？」

「その通りだ。守護兵は魔王との忠誠の証に魔王の血を受け入れ、魔王と同等の魔力を授かる。千芹とお前は、無意識にそれをやっちゃったって事だ。まあ、俺達の事を説明するとそんな感じだな。それともう一つ、この世界で『終焉』と言われている隕石の衝突。ありゃ、隕石じゃない。膨大な魔力の塊さ。つまり、この世界の終焉はカーン達、魔族の仕業って事になる」

「何でそんな事をする必要があるの？」

「簡単な事さ。お前を覚醒させるためだよ。俺が千芹にかけた術は、そう簡単に破れるものじゃない。それこそ何重にもロックをかけ、幾重にもわたり術を施してきた。今既存の方法ではどうにも出来ないほどに嚴重にな。だけど、この術を破る方法が一つだけあるんだ。それは膨大なルシオンと言う生体エネルギーを千芹に注入する事。

そうする事で千芹の楔を解き放つ事ができるんだ。そして、この世界の人間は死ぬとわずかなルシオンを発するんだ。一つ一つのルシオンは大した事ない。だが、それが六十億集まれば話は別だ」

「私を覚醒させる為？ ……ちょっと待ってよ！ ふざけないでよ！

！ 何でそんなことするの？ ハル君の話が本当だったとしてもダルクスなんて関係ない！ 私は、この世界で深司千芹として生きるの！ それが、私の所為で……すべてが壊れるなんて」

その言葉はあまりにも残酷だった。ハルの言う事が正しければ、『終焉』はたった一人の少女の為に引き起こされる。

「大丈夫だよ、千芹。だから、俺達がここにいる。それを防ぐ為にちゃんと秘策は用意しているんだ。だから安心してくれ。俺達がお前等二人を、……いや、この世界を守ってやるさ」

優しい声だった。その声は不思議と不安を取り除いてくれた。

「……信じていいんだよね。ハル君」

「ああ、俺を信じる。その方が燃える、その頑張ってる俺に萌える」
「何か、急にいつものハルに戻ったな」

「はは、さっきまでいい台詞言ってたのに台無しだよ。ハル君」

ハルがどんな人物であつてもやっぱり幼馴染は幼馴染なのだ。それが、二人にとってはすごく喜ばしい事だった。

「さて、ここからが本題だ。エルノア、準備は出来ているか？」

「いつでも問題ないわ」

そう言つて床に杖を突き立てる。まるで、先端に瞬間接着剤をつけたように垂直に立つ杖。もちろん床はコンクリートであつて刺さるわけがない。だが杖は、エルノアが手を離しても倒れる事無く立っていた。一瞬の静寂。だが、その瞬間杖についていた球体が眩い輝きを放つ。そして、その光は一つの魔法陣を形成していった。

「よし、ここまででは成功だな」

出来上がった魔法陣を見てハルが呟く。

「何をするの？」

これまでハル達が見せてきた神術とは違い、明らかに違う大掛か

りな作業。

「この世界の時間を止めるのさ。いや、正確にはこの次元の時間を止めるんだ。この世にあらざるすべての物を止める。それが宇宙であるうと何であるうとな」

「止めるって……お前っ！」

これまでで一番衝撃的な事を口走った気がする。この世界の時間を止める。それをいとも簡単に言い放ったのだ。

「もちろんお前達二人も例外じゃなく止まってもらう。こつちの世界で止まってるのが一番安全だからな。後はこの世界を止めている間に魔族を倒せば、この世界に魔力の塊は落ちてこないんだ。お前達が気がついた時には終焉は終わってるよ」

「そう……なんだ」

「だから、何も心配するなよ。ほんの一瞬だよ、本当に一瞬だ」

続いて展開される黒い魔法陣を見て呟いた。重なり合う白と黒の魔法陣。

「お前達は、俺が守るよ」

決意に満ちた表情だった。この世界の未来はハルの双肩にかかっている。だけど、不安は一切ない。ハルを信じる事が出来るから。その表情を信じる事が出来るから。

「ハル、準備出来たわよ」

「よし。後は術式に神素と魔素を注ぐだけだな。頼むぞエルノア。神素と魔素のバランスが少しでも崩れれば術は失敗するからな」

「妙なプレッシャー掛けないでよ。でも、必ず成功させる。ハル、

最後に言い残した事は？」

エルノアの言葉にハルが振りむく。

「じゃあ、また一瞬後に会おうな。翔流、千芹」

「ああ」

「頑張つてね。ハル君」

一瞬だ。翔流と千芹には本当に一瞬。だが、ハルにとってはとても永い一瞬。

「じゃあな」

その一言に込められた想いが二人に伝わる。

「では、始めてくれ」

ハルの言葉に、エルノアが無言でうなづく。右手に神素、左手に魔素を纏い、杖へと翳す。徐々に光りだしていく杖と魔法陣。その時だった。

『させるか！』

響き渡る声。そして轟音。ビル全体が揺れ、パラパラとコンクリートが剥がれ落ちる。

カーンだった。全身に纏う黒いオーラ。おそらくあれが魔素なのだろう。

「くそっ、やっぱりきやがったか！ ちっ、軽々と結界を超えてきやがって嫌になるぜ！」

即座に剣を召喚するハル。まるでカーンがここにくる事を予測していたように地面を蹴り疾る。一瞬で縮まる距離。そして振りおろされる刃。

「ふん、貴様如きに我々の計画を潰されてたまるか」

剣を抜刀するカーン。黒い刀身の刃がハルの太刀筋を遮る。まるで悲鳴のような音がエントランスに響く。続けてガチガチと音を立てて壮絶な鏝迫り合いが繰り広げられた。

「助太刀するぜ、ハル！」

剣を構えるアレス。刀身を水平に顔の前に掲げる。独特の構えをした瞬間、刀身に緑色の魔法陣が出現した。

「魔法剣、風塵乱舞」

カーンに向かって空を切る刃。刹那、疾風が吹き荒れる。やがて疾風は高速を極め、かまいたちへと進化する。

「ちっ！」

ハルとの鏝迫り合いを振り払い、距離を開け来るかまいたちに備えるカーン。かまいたちに手を翳す。カーンの手から放出される黒い魔素。それは瞬時に壁を織りなし一瞬後氷柱へと形を変えた。

氷の障壁とでもいうべきか。氷の壁は、巻き起こるかまいたちを蹴散らした。さらに、驚く事にその氷の壁はまだ形を変えていく。壁だった氷の壁は一本の巨大な槍へと変化していった。

「死ね」

小さく呟かれた瞬間、アレスに向かって飛んでいく氷槍。

「甘えよ」

ハルだった。手元には紅い魔法陣。そこから一筋の火柱が氷槍を飲み込み、そして消えた。

剣対剣。魔法対魔法。互いが互いの攻撃を相殺していく。

「どうした、カーン。いつもの様に魔法を打ってこいよ」

アレスが笑う。アレスが魔法を躲せば、軌道上には翔流と千芹が居る事は計算済みの行動だ。人質とでも言いたいのだろう。だがそれは、凄まじいほどに効果を発揮する。

「……下種が」

「何とでもいいな」

戦いに卑怯も糞も関係ないと付け加えてにやりと笑った。アレスは純粹に戦いにおいて有利に立つ手段を選んだまでである。

絶対的な有利。勝利が揺るがないものだ と確信する二人。だが、終焉は突然訪れた。

エントランスに放たれる黒い魔素。

「出来れば無傷で連れて帰りたいが、事が事だ。こちら手手段は選んでられん！」

刹那、カーンを中心に部屋全体が爆ぜた。

爆炎と突風がハル達を襲う。そして、それは翔流達も例外ではない。

「千芹！」

襲い来る爆炎から千芹を抱き、身を呈して千芹を衝撃から護る。凄まじい衝撃に骨が軋み、それに耐えうる間もなく吹き飛ばされる。だが、それでも翔流は千芹を離さない。そして衝撃が収まった時、千芹は息をのんだ。

エントランスの中央には微動だにしないカーンの姿。倒れ伏せたハル達を見て笑みを浮かべている。ハル達三人は、辛うじてだが意識はあるらしい。そして目の前に倒れ伏す翔流の姿。全身に火傷を負い、右手の肘より先が千切れて無くなっていた。

「いやあああ」

エントランスに響く慟哭。

「翔流！ 翔流！」

「千……芹。無事か」

か細い声だった。苦痛に顔を歪め吐血する。浅い呼吸を繰り返し、痛みに対して抗っている。

「いい格好だな、アレス。貴様等にはそれがお似合いだよ」

アレス達を一瞥しこちらへと足を向けるカーン。そして、翔流の頭を鷲掴みにした。

「翔……流」

剣を杖のようにして立ち上がろうとするハル。だが想像以上にダ

メージが深刻だったらしくなかなか立ち上がることができない。

「ふん、この男が守護兵になるのを神術で止めていたみたいだな」

頭をつかんでいた手から膨大な魔素が放出され翔流の身体へと注入されていく。

「あああああああ！」

声にならない声がエントランスに木霊する。眼は見開かれ、腕中の血管が浮き上がる。左手は無意識にカーンの腕を掴み、右腕からは血が吹き出た。それでもカーンは容赦なく続けていく。

「くだらない楔などぶち壊してやる！ 己の無力さをそこで噛みしめろ！」

カーンは、さらに魔素の放出量をあげた。その瞬間、翔流に変化が現れ始める。

「う……そ」

呟き、息をのむ千芹。赤茶けた髪と同色の瞳は、燃えるような真紅へと変貌していく。そして、それは『どうか夢であってほしい』と思っていた千芹の願望を打ち砕くものだった。

「ふははは！ この色だ！ この色こそ覚醒の証」

カーンが翔流の頭から手を離すと、翔流はそのまま崩れ伏せた。

（身体が……爆ぜる）

翔流の体内を何かが駆け巡る。心臓の音が、まるで悲鳴を上げたかのように鼓動を打つ。内側から何かが膨張するような感覚を受け、必死で自分の身体を抱きしめた。

「うあああああああ！」

込み上げる何かを咆哮で蹴散らす。だが、翔流が必死で押さえれば押さえほど津波になって襲ってくる。

そして、その何かが魔素だと気がついた時、翔流の力が爆発した。

一瞬にしてエントランスを埋め尽くす黒いオーラ。翔流が放った魔素だ。

完全に守護兵として覚醒した翔流の魔素量はカーンを軽く凌駕するものだった。

「ふはははは！ 素晴らしい！ ダルクス様に匹敵する魔素の放出量。ダルクス様と守護兵殿が居れば我々の勝利は確実だ」

「なんて魔素だ……あの少年が」

呟くアレス。

濃密な魔素。先ほどカーンが放った魔素に比べると段違いだ。そして、その濃度は今もなお深くなり続けている。

「まずい、これ以上の魔素は！」

エルノアが叫ぶ。翔流の魔素に杖が反応し始めたのだ。展開された魔法陣のバランスが崩れていく。色濃く展開されていく黒い魔法陣。対をなす白い魔法陣は既に消えそうになっている。

「術式が！ ……翔流の魔素に反応してバランスを崩したのか！？」

三人に動揺が走る。

「エルノア！ 神素を放て！」

それを即座に察知したアレスは、エルノアに叫ぶ。

「ダメ！ 私の神素量じゃ……抑えきれない！」

「くそ！ 俺が変わる」

毒づき立ち上がるハル、杖に向けて手を翳す。放たれる膨大な神素。消えそうになっていた魔法陣が再びその姿を現した。

「ふん、やらせるところか？」

声と同時にハルの首に蹴りが放たれた。吹き飛ばされるハル。そのまま地面を転がり翔流達の横で止まった。

「死ね！」

振り上げられた剣。漆黒の刃がハルに振りおろされた。

「ハル！」

剣を構え地面を蹴るアレス。だが、先ほどのダメージも抜けていない。

（間に合わない！）

疾走するアレスだが、振り下ろされる剣の方が断然に速い。そして刀身が肉を斬り裂いた。柄から伝わる確かな手ごたえ。だが刀身は振り抜ける事無く身体中央で止まった。

「お前。……なんで」

その場にいた全員が息を呑んだ。カーンの手から剣が離される。

「……守護兵殿」

ハルを庇う様に立ちはだかる翔流の姿。カーンは翔流を斬り付けたのだ。右肩からザツクリと切られ、切り口からは、血が噴き出す。

「こいつの……肩には、この世界の人の命がかかってんだよ！」

凄まじい気迫。負っていた傷は既に致命傷だったはずなのに、それでも翔流を突き動かした衝動。

「翔……流」

自分がやられているはずだった。本来だったらあの剣は、自分に振り下ろされているはずだった。だが目の前の幼馴染は自分の身を呈してまで、自分を救った。

「……やらせねえよ、お前なんかハルはやらせねえ。ハルと千芹は俺が守るんだ！」

左手で柄を持ち剣を引く抜く。血に塗れた刀身。

「うおおおおお！」

咆哮と共にカーンに剣を突きたてる。

うめき声ともに鈍い感触が伝わる。同時にその瞬間をねらってア

レスがカーンの右腕を斬りおとした。

「人を刺すって……気持ちいいな」

そう言い残し翔流は力尽きた様に倒れた。

「翔流！」

倒れた翔流を抱きしめる千芹。だが翔流の反応は一切返ってこない。いや、返す事が出来ないのだ。薄れていく意識。

「嫌だよ、翔流！ 目を開けて！」

目を背けてしまうような酷い傷。それでも、必死に呼びかけ続ける。そして、意識が途切れる前にわずかだが口が動いた。

『ハル……やれ！』

小さく、本当に小さく呟かれた言葉。だが、その言葉は何よりも大きくハルの心に響く。

「ああ」

ハルの手から再び放たれる神素。白と黒の魔法陣が強烈な光を放つ。発動する魔法。

「くそがああああ！」

毒づくカーン。だが、既に魔法の効力が出ているのだろう。その動きは緩慢だった。徐々にそのスピードは、鈍っていく。止まって

いく時間。既に術式を止める事が出来ないと踏んだカーンが、左手で千芹を奪う様に抱きかかえ空中に浮いた。

「嫌！ 離して！ 翔流！」

「くっ、今回はここで引いてやる。今日の屈辱は絶対に忘れはせんぞ」

そう言い残し、二人は闇に消えた。

鎮まるエントランス。

その瞬間に、この世界の時間は完全に停止した。

ブログ 不死（前書き）

とりあえず、ブログはこれでお終いです。
次回より、一週間毎の更新になります。

ブローグ 不死

「ダメ。……全然傷が塞がらない」

「生命力が弱すぎるんだ。回復魔法が効力を発動しないなんて」

消え入りそうな声、それでも必死で魔方式を構築するハル。神術を用いた回復魔法。それは、ベースとなる生命力を活性化させ生まれた過剰エネルギーを肉体に転移させ、身体や傷に補うものだ。だが、そのベースとする生命力が失われた翔流にとっては、それは全く意味をなさない。

「くそっ！ 死なないでくれ、少年！ お前が死んだら、計画は失敗なんだよ」

毒づくアレス。先ほどからアレスの手元で白い魔法陣が現れては、霧散していく。

「ちくしょう！」

再び毒づく。

確かに時間を止める術を成功させる事は出来た。だが、魔力の媒体に問題があったのだ。時間を止める術は、神素と魔素をバランスよく注入していく事により発動する術であり、本来は神素と魔素を持つエルノアが行使するものだった。だが、翔流の守護兵の覚醒により魔素が暴走し、結果的には魔素を翔流が受け持ち、ハルが神素を合わせ、術を発動させた。つまり、術者が翔流とハルになったのだ。その為、翔流には術がかかる事はなくなってしまったのだ。そして、今現在、その魔素を受け持った翔流の命は風前の灯だった。そこで、もし翔流が死んでしまえば術式を支えている魔素は消滅し、

再び時間は動き出すのだ。

「くそっ！　なんで俺なんか庇ったんだ」

ハルの悲痛な叫び。

「……一つだけ方法があるわ」

エルノアだった。

「龍族に伝わる秘術を使えば、魔素は失わないわ」

「秘術？　まさかお前！」

エルノアの言葉に顔をしかめるハル。

「龍族の秘術。聞いた事がある。それは……」

「ええ。死者蘇生よ」

「駄目だ！　それじゃあ、翔流は」

死者蘇生。それは、龍族に伝わる秘術で術者の魔力を媒体に、死者に魂を与える事が出来る魔術だ。その術は、肉体に新しい動力源を作り、文字通り死者を蘇生させる。そして、その術の効果は、術者が死ぬまで継続される。その際、蘇生した人物の魔素、神素はうしなわれずに、継続する。だが、それは、肉体に新しい動力源を作るだけであって、止まってしまった肉体の機能は復活するわけではない。つまり、脳は完全に停止してしまい、意識を持たず、本能の身で動くゾンビになるという事だ。

「幼馴染なんだよ。……この世界でできた初めての親友なんだよ」

涙交じりの声。

「でも、死者蘇生を使わなければ、確実に死ぬわ」

今もなお、アレスが必死で神術を使っているが、それは延命にすぎない。アレスが手を止めれば、翔流はそのまま人生に終止符を打つ。

「そして、彼が死ねばアズラベルも、この世界も滅ぶでしょうね」

「……」

「大丈夫よ。気休めだけど彼はまだ生きている。脳や身体機能が止まる前に死者蘇生をかければ、彼は意思のある不死人になる事ができる」

「……でも」

ハルにはまだ抵抗があった。例え、術が成功しても翔流はなんと言うのだろう。別の動力源をつけたと言うだけで、やはり死んでいる事には変わりはない。翔流は自分の死を受け入れる事が出来るのか？

さまたまな不安がよぎる。

望まれない不死。そうなればこの先、翔流には辛い人生が待っている。

「ハル。彼は、どんな気持ちで貴方を救ったのかしら？ その気持ちを考えてもらんなさい。その気持ちを酌んだ上で答えを出さない」

鋭い眼光。その眼差しは、ハルを捉えて動かない。

「くそっ」

小さく毒づく。頭の中に響く、翔流の声。

『こいつの……肩には、この世界の人の命がかかってんだよ!』

「まったく、重すぎるんだよ」

流れる涙。

「私は、私に出来る事をやるわ。だから、貴方も貴方にしかできない事をやりなさい」

エルノアが言い放った言葉。それは何物にも代えがたい決意の表れ。まるでハンマーで頭を殴られた様なそんな錯覚に陥る言葉。

「簡単に言いやがって……告げなきやいけない方の気持ちも考えろよな」

涙を拭うハル。だがそれは、ハルの決意でもあった。

「やってくれ、エルノア。責任は俺がとる」

「ええ」

ハルの言葉に頷くエルノア。

「アレス王、ハル。術が終わるまでずっと、神術を絶やさないうちに」

「ああ」

「まったく。わかったよ」

翔流を一瞥するエルノア。こうして、不死の魔術は始まった。

いつも、リーダーのような存在だった。

ふと気がつけば周囲には自然と人が集まる。幼い頃から続いている空手の所為か、曲がった事が嫌いであつて真つ直ぐな性格をしていた。誰かが困っていたら無視をする事ができない。仲間が困っていたら自分を犠牲にしても助ける。浅葱翔流はそういう人間だった。

「……流！ 翔流！」

呼びかけられた声に、急速に戻る意識。目を開けると、知らない天井が飛び込んできた。そして涙で崩れた千芹とハル。どうして泣いているのかは分からない。だけど、何かをやってしまったという罪悪感はある。

「……ここは？」

白を基調にした部屋と無機質な明かり。そして、自分が寝ていたのがベッドだと気がつく。

「病院だよ。翔流は子供を助けてトラックに轢かれたんだよ」

「そうなのか？」

薄らとその瞬間を思い出す。

「ああ。そんな気がする」

そう言つて上半身を起こすために、腹筋に力を入れた。その瞬間。

「う……あつ」

全身に走る激痛。

「おい、無茶するなよ。お前、全身酷い怪我なんだぞ」

「そうだよ。それに、三日も目を覚まさなかったんだからね」

言われてみれば全身に何か、違和感を感じる。おそらく包帯が巻かれているのだろう。所々が痒い。

「子供はどうなったんだ？」

「無事だよ。翔流が寝てる間に何回かお見舞いに来てたよ」

「ははは、無事か。よかった」

「翔流にどうもありがとうっていつもお礼を言ってた」

「ふうん」

多分、気を失っていたからなのだろう、いまいち事故にあった実感がわからない。

「ふうんってお前。……まあ、いい。それより、千芹にも礼を言えよ？ あの時、千芹が居なかったらお前死んでたんだぞ」

「え？」

「ちよつと、余計な事言わなくていいよ、ハル君」

「お前がこの病院に運ばれてすぐにトラブルがあったらしくてな、輸血の準備が遅れたんだ。その間千芹は、医者に頼んで自分の血をお前に輸血したんだ」

「マジか」

ハルの言葉に、一瞬だけ垣間見えた死の恐怖。つまりは、千芹は

翔流の命の恩人という事になる。

「……そっか、ありがとう。千芹」

「いいよ、そんなの」

「それに、翔流が死んだら私も死ぬってずっと泣きじゃくってたんだぜ」

「ちょ！ ハル君！」

耳まで真っ赤にする千芹。

「ハル君だって泣いてたじゃない！」

「さあ、どうだっけなあ？ 記憶にねえな」

「その年で痴呆症？ ここ病院だから診てもらったら？」

いつものように始まる低レベルな争い。だが、その一言一言に歓喜が含まれている。

「もう。しょうがないんだから。まあ、いいよ。私、先生呼んでくる」

そう言って病室を後にする千芹。残された二人。静寂が包む。

「ハル」

「ああ？」

「悪かったな、心配掛けて」

「何だよ、急に」

「お前等二人の泣き顔を見て思ったんだ。『ああ。俺、迷惑掛けたんだな』って。そしたらなんか悔しくてさ。もつと言える事もいっぱいあったはずなんだよ。だけど、どうしていいかわからなかった」
「ばーか、怪我人がそんな事考えてんじゃねえよ」

「でも、俺の行動で千芹とお前が泣いたのは事実だ。……今まで、俺が守ってやるなんて一著前な事言ってきたけど全然駄目だな。俺」

言葉にして気づく。自分は無力なのだと。そして、それが罪悪感の正体なのだと。

「そんな事ねえよ。今回の事故だけど、俺は純粹にお前がすごいと思っただぜ。見ず知らずの子供に命をかけるなんて、なかなかできねえよ。それこそドラマの世界でしか見る事がないような事をお前がやるんだもんな、大したもんだよ」

「けど……」

「お前、今回の事でそれに気づけたんだろ？ なら、それでいいんじゃないか？ まあ、それを全部ひくるめて翔流なんだろ。正直、その性格に救われてるんだぜ。俺も、千芹も」

その一言で、心の悶えがとれた気がした。

「だから、また守ってくれよな。翔流」

「……ああ」

だから、また守っていける。この掛け替えのない関係を。「守るさ。いつだって」

だから、また守っていける。この大好きな人達を。そう思った瞬間、急に眠くなる。思った以上に体力が消耗しているのだろう。

「わりい、ちよつと寝る」

「ああ、ゆっくり休めよ」

まどろむ意識の中聞こえた、ハルの声が心地よかった。

そして、決意する。この先どんな事があってもこの二人を守って行こうと。

掛け替えのない幼馴染を。

知らない天井。その光景に既視感を覚える。だが、その天井は大きな穴が開いており、どす黒い空が見えていた。

「目が覚めたか？ 翔流」

「ハル？」

翔流の視界がハルを捉える。見慣れない銀色の髪の毛と碧眼の瞳。だが、そこにいるのは間違いなくハルだ。

「起きれるか？」

「ああ」

身体を起こし辺りを見回す。ボロボロになったビルのエントランス。そこには、アレスとエルノアの姿もある。

そして思い出す。あの激しい戦闘を。

「……………っ！」

何かを思い出したように、左手で右手を抑える。そこには、無くなった筈の肘から先があった。続けて、右肩を触る。そこには確かに裂けていたはずの傷跡は、すっかり無くなっていた。

「夢……………なのか？」

そんなはずはない。自分は確かに痛みを体感した。気が狂うほどの激痛を忘れるわけがない。それに、自分の左手にはまだ人を突き刺した感覚が残っていた。

再びエントランスを見回す。ボロボロの外壁。それはまさしくそこで戦闘が行われた痕が残っていた。そして、その時ある異変に気がつく。

「千芹は？」

そこに大切な人が居ない。一番守りたかった人物がそこには居なかった。

「千芹はどうした！」

走る焦燥。エントランスに声が反響する。

「……すまない。連れ去られた」

認めたくない事実。

「連れ去られたって、……お前、それを阻止するためにここに来たんじゃないのかよ！」

「ああ、そうだ」

「そうだ、じゃねえだろ」

翔流の拳がハルの頬を捉えた。殴られた衝撃により、倒れるハル。あの状況では仕方のない事だったのかもしれない。分かっている。それは分かっているのだが、どうにも込み上げる怒りを抑える事が出来なかった。

「すまない」

それを、わかった上で殴られたハル。自分でも理不尽だと分かっている。だが、ハルはそれを微動だにせず受け止めた。

「すまない」

翔流に向けられた真っ直ぐな視線。殴られてもなお、その視線がぶれる事はない。

「……っ。くそっ！」

やり場のない怒りをこらえる為に胡坐をかく。そして、それを全員が見つめていた。何も言わずただ時間だけが過ぎていく。五分、十分。正確な時間は分からない。だが、時間だけが翔流の心を冷ましていく。

どのくらいそうしていただろう。見当もつかない。不意に翔流が静寂を破る。

「夢を見てたんだ」

「は？」

「事故起こした後の夢でさ。懐かしかった」

「ああ」

頷くハル。

「なあ。お前、あの時の会話覚えてるか？」

「ああ。覚えてるよ」

「俺。結局、守れなかった」

消えそうな声。まるで自分の無力さを自分に言い聞かせているようにも感じられる。

「……」

そんな翔流を、ただ無言で返すハル。慰めなんて陳腐な言葉ではない。それをハルは知っていた。

「なあ」

「うん？」

「話してくれよ。俺が気絶してから的事」

「ああ」

ポツリポツリと紡がれていく言葉。この世界の時間が止まった事。千芹が浚われた事。そして、翔流が死んだ事。死者蘇生の事。多少の衝撃は走ったが翔流は、真摯に受け止めた。

「はは、本当だ。心臓動いてねえや」

胸に手を当てた翔流が呟く。

「今、お前の額にある六芒星の痣が動力源であり、不死人の証なんだ」

ハルがポケットから鏡を取り出し翔流を映した。その額にはくつきりと六芒星の痣があった。翔流は『そっか』と言って自分の額をまじまじと見つめていた。

「……なあ、翔流」

「うん？」

「勝手に不死人にしまった事、怒らないのか？」

「なんだよ、怒ってほしいのか？」

「いや、そうじゃないけど」

「だったらいいじゃねえか。結局俺は、あの時に死んでいたんだ。さっきの話だと、俺が死んだ時点で術は失敗してこの世界は終わってたんだろ？ だったら、お前は間違っちゃいねえよ」

「……だけど」

「どっちにしろ、明日には死ぬつもりでいたんだ。もとより死ぬ事は覚悟していたよ」

本来、終焉は明日に迫っているのだ。死ぬという事に関しては、一年ほど前から覚悟は出来ていた。

「まあ、そう考えればどうって事ない。エルノアさんが死ぬまでの寿命だったけ？ だったらエルノアさんにはがつり長生きしてもらおうじゃねえか」

と言って笑う。

「それよりも、問題なのは千芹の方だ」

ハルの話だと、敵国のダーゼルムと言う国に連れて行かれたのだ言う。こちらの世界の術は成功して時間が止まっているため、魔王に復活するという事はないのだが、それでも厳しいものがある。問題点は山の様にあるのだが、一番の問題点は、ハルの神術を研究される事だ。もし、他に魔王を復活させる方法を発見されれば、たちまち魔王は復活する。その場合、当然の様に深司千芹と言う存在も消えてしまう事になる。

「千芹が消えちまうのは、俺としても避けたい。大事な幼馴染だしな」

考え込むハル。何気なく呟いた言葉。それは、翔流にとってすごく意外な言葉だった。ハルは、千芹が魔王だと言いながらも、ちゃんと深司千芹と言う存在を考慮し、大切な幼馴染だと言っている。そして、それはこちらの世界の事もちゃんと考えているという事だ。翔流にはそれが嬉しかった。

「やっぱ復活される前に奪還するしかないだろ」

「奪還つて、そんな簡単に出来るもんじゃないぜ、なんせ敵の本拠地だ」

「でも、それを何とかするのがハル達の仕事だろ？」

「簡単に言ってくれるな」

ここで、初めてアレスが口をはさんだ。

「確かに戦況ではうちが今勝っている。けど、本拠地を責めるとなるとそれなりに兵力が必要になる。それにダーゼルクにはカーン級の奴等がゴロゴロいるんだ。そうなれば総力戦は確実だ」

確かに、カーン一人でこの有り様だ。下手に攻めて兵士を減らすなんて愚の骨頂だ。

「まあな」

再び考え込む。長考に次ぐ長考。そして、一つの答えが導き出される。

「……うまくいくかは分からないが、翔流を利用するって手もある

な」

「俺の？」

「ああ。今、お前は守護兵として完全に覚醒している。お前の魔素は、ダルクスの魔素と同じものだ。つまり、同調しやすいって事だ。もし、翔流が魔素を使いこなせるようになれば念話ぐらいは出来るんじゃないか？」

ハル、アレス、エルノアの三人が一斉に翔流を見る。正直その視線が痛い。それもそうだろう。もし、念話が出来れば内側からダーゼルムを掌握したのと同じだ。

「そんな事できるのか？」

「ええ。稀な例だけど波長の近い神素を持つ者は、念話をする事ができる。それだけじゃない、波長を利用すれば神素の倍加だって出来るのよ。神素であれ、魔素であれ、分解していけば魔力細胞にたどりつく。恐らく理論的には可能よ」

とエルノア。

「なあ、翔流」

「うん？」

「もう一度、俺達を信じてみないか？」

万弁の笑み。

「翔流少年。君を、我が国に迎え入れたい」

手を差し出すアレス。ハル同様同じく万弁の笑みを浮かべている。

「私からもお願いするわ」

三人からの熱いラブコール。だがその裏には、物凄い思惑が渦巻いている。

確かに、ハルの言う事が可能ならそれはもう、勝利と同義語だ。

「ちなみに聞くけど、拒否権は？」

「この世界に留まりたいなら止めはしないぜ。ただ、世界中の時間が止まってるけどな」

軽くいじめに近い。この世界に留まる事を選んだ場合、それは完全に孤独になるという事だ。さらに言えば、心臓こそ止まっているが、喉は渴く。いざ水を飲もうとしても、蛇口からは水は出ない。運よく水を見つけたとしてもその水は、液体ではない。固体なのだ。時間が止まっているのだから当然、この世界にある物質は固まる。そんな物をいくら飲み込んだとしても、喉が潤うわけがない。となればそこに待っているのは生き地獄だ。

「大人って汚いな」

すべてを理解した翔流の選択肢は、間違いなく一択だ。軽く非難の目を送る。

「つたく、わかったよ」

まるで、計画通りと言いたそうな三人の笑み。

「やれるだけの事はやってみるか」

そもそも、千芹の運命もかかっているのだ。もともと拒否するつもりもなかった。もし方法があるならどんな方法であっても実行す

るつもりだった。そう考えれば利害一致したと考えるべきだろう。

「決まりだな」

足を振り上げその反動で立ち上がるハル。

「悪いな、翔流。巻き込む事になっちまって」

手を差し伸べるハル。

「まったくだ」

軽く怨嗟の声を上げるもその手をしっかりと握りしめる翔流。握るだけで互いの意識が伝わる。

「どうする？　なんか用意する物とかあるか？　衣服だったら向こうで揃えられるし、生活に必要な物は全部向こうにそろってるはずだ」

「ああ。服が揃えられるんだったら特には無いかな」

現在、翔流の上着はカーンに斬られた所為で破れてしまい、ハルのジャケットを拝借中である。もし、揃えられないならもう取りに行く必要もあるが、現地で調達できるならそれに越した事は無い。

「よし、じゃあ行こうか。イグニリアスへ」

ハルがそう呟くとエントランス全体に大きな魔法陣が描かれた。光を放つ魔法陣。そして、魔法陣の光はすべてを呑みこんでいった。眩い光。その光の中で考える。これから向かう先が異世界だとい

う事。自分の運命の事。そして最後に考えたのは千芹の事だった。

プロローグ 不死（後書き）

と言うわけでプロローグ終わりました。

王道です。王道中の王道を走ろうと思ってます。

プロローグが長くなってしまったのは翔流が異世界に行くまでプロローグにしようなんて考えていたからです。

そして、いきなり異世界に飛ぶよりも上月的には明確な理由があり、自分の意思で異世界に行くという方が好きだったので長くなってしまういました。

ですがようやく無事に本編に入る事が出来ます。

というわけで次回より、本編である異世界編が始まります。

そして、読んでくださった方が意外に多い事にびっくりしました。

もし、矛盾点や誤字脱字がありましたらご一報していただけると幸いです。

それでは

第一章 その一 異世界と意地（前書き）

ようやく、異世界編です。

が、自分で書いててあまり異世界という感じはしませんw

それと更新日を私の都合上毎週金曜日とさせていただきました。
ちゃんと更新していけるように頑張ります。

第一章 その一 異世界と意地

集束していく光。徐々に眼が機能し始めていく。そこに映し出されていく光景。

「なんじゃこりゃ」

それが、翔流が異世界についてから発した第一声だった。そこは、見渡す限りの大草原が広がっていた。

「ようこそ、アズラベルへ」

アレスが頭を下げる。

「は？」

思わず情けない声が出た。丁寧に頭を下げられても見渡す限り草原である。

「ははは、リアクションに困ってんでやんの」

それを見たハルが、大爆笑した。

まるで、ドッキリに嵌められたような光景である。

「ハル、笑っちゃ可哀そうでしょ？　ここに初めて来た人は大体こうなるわ」

「ああ、わるい。そうだったな」

エルノアの言葉に必死で笑いを堪えるハル。

「ここはアズラベルの首都クーラルって言うんだ」

見渡す限りの大草原をさしてハルは笑う。

「普段は結界を張っていて大草原にしか見えないのさ。でもこうするとな」

ハルは、懷から石を取り出し空に翳した。先ほどハルが翔流達に渡した球体とよく似ている。

すると、球体は眩い光を放った。そして、眼の前に現れた物。

「……すげえ」

翔流の眼に映し出された物。それは、翔流の予想を大きく裏切るものだった。いや、むしろ裏切るといってもぶち壊したと言っても過言ではない。そこに現れた物は、まさしく大都市だ。防壁こそ有る物の、それは翔流がいた世界と何ら変わる事はない。

聳えるビル群。街中を走る高架線。そして、街の中心には一際大きいビルが建っていた。

「へへ、驚いたか？」

「驚いた」

眼を丸くした翔流が呟く。

「驚いたけど、想像と大分かけ離れてるわ」

「だろうな」

まず翔流の頭にあつたのは城、もしくは宮殿だ。だがそこにあつ

たのはどう見てもビルだ。

「てっきり、魔法なんて言うからもつと中世的なもんだと思ってた」

ハルの問いに素直な感想を漏らす翔流。

「はは、それは向こうの世界の人間が空想的に作り上げた世界だからな。まあ、魔女狩りなんて物もあつたからその印象が強烈なんだろう」

確かにその通りである。魔法とくれば自然とイメージされる中世ヨーロッパのイメージが強い。そして、その原因は魔女狩りにあるといっても間違いではないだろう。

「って言っても、種族によって文化は異なる。こんな感じなのは神族だけさ。さあ、行くぞ」

ハルの言葉に合わせて防壁の扉が開いた。

街の中に入ってみると、そこは翔流が日常的に見ていた風景と何ら変わらない風景が転がっている。アスファルト、コンクリート、街灯はもちろんの事、車やバイクなんともある。強いてないと言えば電柱ぐらいか。その代わりにどの建築物にも魔法陣が記されていた。

「こっちの科学も向こうほどじゃないけど、結構進んでるんだぜ」
「そう……みたいだな」

感嘆の息を漏らす翔流。ここが今までいた世界じゃないのは分かっている。だが、翔流の目の前には、今まで見てきたような日常がそこにあるのだ。

「神族は昔から科学と魔法学の融合を目指してな、魔工学っていうんだが。まあ、その結果がこの街に現れてるのさ。あっちの世界では固形燃料や電気を使っていたが、こっちの世界では原動力が神素や魔素なんだ。ほら、建物とか街灯に魔法陣があるだろ？」

「ああ」

「あれは自然界にある神素を吸収して電気に変える装置なんだ。向こうと違ってこっちの世界は空気がきれいだろ」

確かに、言われてみれば吸い込んだ空気がやたらと肺になじむような気がした。それは俗に言う『空気がおいしい』と言うやつだ。

「へえ」

「後は、向こうの世界と違う点って言ったら魔工具ぐらいか」

「魔工具？」

「ああ。この世界独自の技術でな。ほら、さっき渡した石あるだろ？ ちょっと出してみ」

「ああ」

ハルに言われポケットから石を取り出した。相変わらずオレンジ色で太陽の光を受けキラキラと光っていた。

「これは、カードリッジって言ってな。まあ、魔方式の刻まれた物を魔工具っていうんだが、これはその代表的なものだな。ちょっと失礼」

そう言ってハルは手のひらにあったカードリッジを取り上げた。

「アレス、エルノア。なんか喋ってくれ」

ハルがそう促す。刹那。

「○×わ \$し&@ずQ」

「#ざ&%〒。 わ§」

「……え」

何を言っているのか全く理解できなかった。

「分かったか？ この中にはいろいろな術式が組み込まれててな。結界を無効にする術式から翻訳までいろんな機能が含まれてるんだ。今回はカードリッジで説明したけど実際、魔工具と呼ばれる物はあるとある。生活用から戦闘用までいろいろあるんだぜ。ああ、そうだ。例えば、エルノアが持ってたあの杖も魔工具の一種さ」

「へえ」

そう言っつて、手のひらの上のカードリッジをまじまじと見る翔流。その反応は流行に疎いおじいちゃんだ。

「まあ、そこら辺はまた教えてやるよ」

「ああ、頼むわ」

カードリッジをポケットにしまい込む。

「さあ、行くうぜ」

ハルに促され足を進める。

「行くつてどこに？」

「セントラルタワーだ」

そう言つてハルは街の中心にある一際大きなビルを指差した。

「あそこがこの国を支える中核なんだ」

「へえ」

言わばこの国の都庁みたいなものだろう。

進みながら、流れる風景を眼で追う。行き交う人々。街全体は首都と言っただけあつて活気づいている。賑わいを見せる商店街。その人混みは、少しだけアメ横を連想させた。

「……なんか、あんまりこっちの世界に來た感じがしねえのな」

翔流の言葉にハルとアレスは苦笑した。

「でも、生活文化が変わるよりは全然いいな。過ごしやすそうだ」

この世界に來る時、生活文化の違いや食文化の違いは否めないと思っていた。だが、ここまで自分のいた世界に近ければさほど苦にはならない。翔流の正直な気持ちが毀れた。

「まあな」

頷くハル。そして四人は中央に聳えるビルに向かって足を進めた。

「ふん…… 守護兵風情がこの国に足を踏み入れおつて」

会議室の様な所にアレスを中心に軍服を着こんだ老若男女が集まる。ハル曰くこの国の武官と文官だそうだ。要はここにいる者は全

員幹部であり、ここはアズラベル軍幹部の集まりだ。そして、セントラルタワーに到着した途端、案内もそこに開かれたこの幹部招集。現在この者達は翔流の処遇を話し合っているのだ。

「この者の内に秘める魔素は……確かに膨大な物ですな」

「魔王の分身とも言える守護兵など地下牢にぶち込んでおけばいいのです」

「しかもこの守護兵は不死人というではないか。それではカーンと大差ない。もしこの者がダーゼルムに渡りでもしたら、考えただけでも恐ろしい」

彼らは好き勝手に言葉を吐き、翔流に浴びせていく。

（やべえ、心が折れそうだ）

自分が守護兵と分かっていてハル達の国に来たのだから、ある程度理解していた事だが、実際に体験してみると想像以上だった。まずハル、アレス、エルノアを除く全員に言える事として、必ず自分を蔑んだ目で見ていているという事だ。そして、次に自分の扱いが厭くまで魔族と言う事だ。つまり三人以外、全員翔流の事を敵として見ているという事だ。

そして、事の発端はアレスの一言から始まる。

『翔流少年には、我が軍に入ってもらおう』

正直これを聞かされた時は翔流も驚愕したが、冷静に考えれば当

然の事だった。

アレスは自分の監視下に翔流を置きたかったのである。そして、翔流本人にしても軍にいた方が情報を集めやすいと踏んでいた。つまり互いの意見が合致したのである。

「だが、もし彼を飼い馴らせる事が出来れば我が軍は飛躍的に強くなる事が出来る」

「そうだ、彼の魔素さえ利用できれば敵は一網打尽じゃないか」

「彼の魔素量は、魔王と同等だと言っしな」

と武官の数名が主張する。先ほどからの繰り返しである。問答無用で牢屋にぶち込もうとする者と、この国の兵士として利用しようという者。既にこの論争も正直な所飽きた。

だが、翔流の意志とは無関係に言い争いは続く。

「だから、こんな危険な人物は牢屋に入れておくのが一番だ！」

「牢屋に入れるには惜しい人材だ！」

ああでもない、こうでもないと言い争っては、結局その二択に辿り着く。

一向に決まらない翔流の処遇。当然と言えば当然なのだろう。

感嘆を漏らす翔流。それを察知したハルが口を開いた。

「落ち着け、皆」

ハルの一言に会議室は静寂に包まれた。ここに向かう途中で聞いた話だが、ハルがこの国の最高司令官であり、アレスの次に権力を持っているというのは、どうやら嘘じゃないらしい。

「まず、浅葱翔流への侮辱は俺が許さん」

ハルの一言に室内は静まり返る。ここで名字をつけたのはここが正式な会議である事を示していた。

「次に、浅葱翔流の処遇についてだが、……彼には我が軍に入隊してもらおうと思っている。まあ、ダーゼルムとの争いが終われば彼は軍を抜ける。言わば期間限定と言う奴だ。そして、彼に与える階級は三尉を与えようと考えている」

「……三尉だと？」

「……魔族の分際で幹部」

それぞれに口籠る文官達。この国の階級制度は、日本の陸上自衛隊と同じ呼び方をしているらしい。その方が、翔流としては分かりやすいから有りがたいものだったが。ちなみに、この国では、アレスを将、ハルを将補、エルノアを一佐としている。日本で考えれば階級こそないもののその上に防衛庁長官と内閣総理大臣があるのだが、ここはアズラベルの軍だ。アレスは王と将を兼任しているのだろう。しかし三尉と言うとかなり上の階級になる。その扱いは三尉とは言え幹部クラスだ。他の実績から這い上がったきた幹部には堪らないものだろう。

「浅葱翔流は、この国にとって重要な役割を担っている。俺の目論見がうまくいけばこの国の勝利は約束されたも同然だ。それを考慮したうえで翔流を幹部に招いた。何か反論はあるか？」

重要な役割という言葉が翔流の胸に押し掛かる。嫌なプレッシャーにも似ていた。だがそんな事はお構いなしにハルは話を進めていく。

「……誰も反論は無いようだな」

先ほどまで反論していた反対派もハルの言葉にただ悔しそうに俯くだけだ。やはり魔族とは相当嫌われているらしい事がその行動で感じ取れた。

「なら、これで本日の幹部招集は解散だな」
「待ってください、ハルト将補」

凜とした声と、挙げられた手。その声の持ち主は、翔流よりも少し年上といった感じの女性だった。ちなみに、この国ではハルの名前は、ハルト・クロライクと言う名前らしい。とは言っても、翔流の中ではハルは穂積ハルなのだが。

「何だ？ ラクア三佐」
「私には、その者が幹部入りをする理由がわかりません」

きっぱりと言い切るラクアと言われた女性。金色の髪と、ややつり目がちな眼が印象的だった。

「確かに、ハルト将補の言うとおり、その者にはこの国にとって重要な役割を担っているかもしれませんが。ですが、幹部とはこの軍の機密を担う者。何処の誰かも分からぬ輩がいきなり幹部入りと言われても、下の者に示しがつきません」

ラクアの意見に反対派の人間が賛同する。どうやら、彼らは本気で翔流が幹部入りするのが気に入らないようだ。

「ほう。では、どうすればいい？ 率直な話し、翔流の実力を示せというのだろう？」

嘆息をつくハル。ラクアにストレートに答えを突き付ける。

「はい。下の者も納得がいくように筋を通していただきたい」

ラクアは短く答えた。

「どうしてこうなった」

眼の前には広い空間が広がっている。石畳を敷き詰めた正方形の闘技場。ここはセントラルタワーの地下演習室だ。そして翔流達はその控えにいる。その闘技場を囲むようにいるギャラリー達。結構な人数がそこには居た。

「悪い、翔流。あいつ等を言いくるめる事が出来なかったのは俺のミスだ」

「ミスってそりや当り前だ！　そもそも、いきなり幹部とかありえねえし。俺は三士から始まったって全く問題なかったんだ」

先ほどのハルの発言では、自分の階級は三尉。普通に始めれば三士から始まるのだから、周りの幹部が驚くのも無理はない。

「馬鹿いうな、俺はこの国では将補という立場にある。もちろんお前の世話は見るつもりだけど、手の回らない時もある。それが、士ならなおさらだ。だから最低でも幹部として扱おうとアレスと決めたんだ。それに士が俺やアレスの部屋を出入りしてみる。それこそ軍法会議物だ」

「……そうなのか」

軍事に措いて階級とは絶対的な権力である。例え、任務とは言え、将や将補の部屋に土が出這入りすること自体が異常なのだ。

「しかもラクアの奴、……よりによって、武級特進試験を選びやがって」

武級特進試験とは、この国に措ける階級を上げるための試験である。通常、階級を上げるには、それなりの実績が必要になる。戦場で手柄をあげる者も居れば、兵法を考え指揮を取り、軍に有益をもたらすなどの実績を考慮したうえで階級は上がっていくのだ。だが、この国には特別な制度がある。自分の実力を存分に発揮できればそれに見合った階級を与えと言う制度だ。そしてその実力を示す方法とはガチンコの殴りあいである。

その試験を翔流はこれから受けに行くのだ。そして、翔流の狙う階級は三尉。対戦相手は三尉がやってくるという事だ。

「しかも相手はソニア三尉だよ」

頭を抱えるハル。反対側に立っている兵士を一瞥した。一八〇は優に超える長身と、引き締まった筋肉。栗毛色の髪を肩まで伸ばし、一見遊び人にも見えなくはないが、こちらを覗く、冷やかな眼光は明らかに死線を潜り抜けてきた兵士の物だった。

「あいつら本気で翔流の幹部入りを拒絶してやがるな」

「あの人、そんなに強いのか？」

「強いね。俺も、神術無しの純粋な勝負じゃ勝てる気がしない」

翔流から漏れる嘆息。

「まったく、めんどくせえな。で？　ここの体術のメインは？」

「基本的に足技メインだな。ラキートと言って、この国は武器を持つて戦う事を想定した体術が発展したんだ。下段攻撃のあるテコンドーだと思ってい。蹴り技で隙を作り、隙を武器で突くつてのが主流だな」

「ふうん。テコンドーねえ」

今回の試験は翔流が一般人と言う事とハルとアレスの最頂と言う事もあり、神術と武器の使用は認められていない。その二つが無くなるだけで少しだけ翔流も戦いやすくなっている。

「ちつ、始まる前にどんな動きするかを見れば攻め方も変わるんだろうけどな」

ぶつぶつと呟く翔流。その表情がどんどん変わっていく。翔流が集中した証拠だ。頭の中でイメージトレーニングをしているのだ。高まる意識。自分の体験してきた経験を眼の前の男に当て嵌めていく。

（身長は樹と同じぐらいか）

長身の対戦相手は、樹で慣れている。身長差の面は問題ないだろう。となれば、残るは足技とその威力である。

（テコンドーねえ）

テコンドーとは、もともと空手と韓国の古武術テッキョンがベースの格闘技である。多彩な蹴り技は勿論、突く、叩く、受けるなどの手技もある。おそらく、手技の部分が武器技になるのだろう。だが、これは厭くまで翔流の想像でしかない。実際翔流もテコンドーの試合は見た事があるが、その足技の多さに舌を巻いた経験がある。

今回は武器を持っていない試合なのだ。間違いなく手も使ってるだろう。

「……ったく、めんどくせえな」

二回目の同じ台詞。嘆息を吐き、ハルから借りたジャケットを脱ぎ、ストレッチを始める。開脚から前屈。自分の関節可動域を入念に解していく。

（足技メインって事は体幹もぶれないだろうな）

体幹とは、腹筋と背筋を中心とした胴体部分の事を差し、この筋肉が発達している人間は基本的に重い攻撃を放てると考えていい。そして、眼の前のソニア三尉の体幹も素晴らしい筋肉をしていた。だが、一つだけ救いもある。蹴り技と言う事は無拍子ではない。必ず拍子があるのだ。それが、どんなに素晴らしい体幹を持っていたもだ。つまり予備動作が必ずあるという事だ。

（だけど、攻め方を変えれば何とかなるか）

「なあ、この試合って基本的にはバーリ・トウードだよな」

「ああ、金的意外なんでもありだ」

「そっか」

（なら戦法を変えるか）

翔流の顔に不敵な笑みが浮かぶがそれを見た者は誰一人いなかった。

「ハル。この試合勝たないとだめか？」

「まあ、出来る事なら、勝ってもらいたい」
「仕方ねえ。意地って奴を見せてやるよ」

翔流はそう言い残し闘技場へと駆け出して行った。

闘技場の中央で睨み合う二人。ギャラリーからは歓声が上がリ異様な盛り上がりを見せていた。

「名前は？」

「浅葱翔流」

「翔流か。俺はソニア・イクリプス。君の健闘を祈る」

見た目とは違い、意外と好青年と言った所か。そして、この人物は対峙して初めて分かったがまだ若い。

差し出される拳。その拳を軽く合わせる。触れ合う拳。この事は試合開始を表していた。

（まずは出方をみるか）

この時、翔流の選んだ戦法は後の先である。後の先とは分かりやすく言えば相手の攻撃を予測し受け、外した後の返し技行う事、つまり相手の攻撃を読んだうえでのカウンター攻撃になる。厭くまで相手の動きを見てから作戦を立てるので無難と言えば無難だろう。奇妙な間合い。互いの制空圏が触れ合うぐらいの間合いだった。ちなみに二人の制空圏は武器を所有していない為、単純に考えて自分の四肢が届く範囲の事だ。この距離を考慮し攻撃を予想する。

刹那、地面が蹴られた。縮まる距離。ソニアが動いたのである。まずは挨拶代わりとも言える左ストレート。モーションが少なく

無駄のない動き。閃光の様な左ストレートが翔流を襲う。
恐らく相手も様子を見たいのだろう。

「ちっ！」

想像よりも速い攻撃に毒づきながらも右手で手刀を叩き込み軌道を反らす。

痺れる右手。それはその攻撃が重い事を意味した。

「ほう」

翔流の手刀に興味を持ったのか、ソニアは小さく笑い続けざまに攻撃を仕掛けてくる。上段回し蹴りから水面蹴り、立ち上がり様に踵を天に向かつて突き上げる。その一つ一つが洗練された動きだった。だが受ける事に徹している翔流もそれはすべて見切り丁寧に攻撃を受け流していった。

（一つ一つの攻撃が重いな）

恐らく頭にクリーンヒットすれば根こそぎ意識を刈り取られるだろう。

（けど、やっぱりテコンドーベースだな）

なんとなくだが、蹴り足の軌道を理解する。それさえ頭の中に叩き込めばなんとか戦う事は出来る。

（さて、狙うか）

次に来る技に狙いを定め、静かに攻撃を待つ。恐らく相手も翔流

が後の先を狙っているのは既に気が付いているだろう。

だがソニアはそんな事お構いなしに鞭のように足を撓らせ、再び中段後ろ回し蹴りを放つ。

軌道を冷静に読む翔流。そして翔流は今日初めて攻撃を仕掛けた。

「……ぐう」

ソニアから苦悶の声が漏れた。ソニアのアキレス腱に翔流の肘が突き刺さっていたのだ。

翔流のとった行動、それはソニアの後ろ回し蹴りに肘鉄を合わせることだった。狙うべきはアキレス腱断裂。アキレス腱は、蹴り技には絶対不可欠なものだ。それさえ破壊できれば勝負は一瞬で決まるのだが、ソニアは寸前でその行動を読み取り少しだけ軌道を反らしたのだ。

（ちっ、壊れなかったか）

小さく舌打ちをした後、翔流はソニアからの距離を空けた。冷静に相手を捉える為に。刹那、ソニアの眼がより冷酷なものへと変わる。これは恐らく翔流を舐めていた自分への戒めなのだろう。相手は最小の動きで隙の小さい技で攻めてくるのは明白だった。だがそれでも翔流の目標は変わらない。厭くまで部位破壊を最優先に戦うだけだ。

苦痛に顔を歪ませながらもソニアが地面を蹴る。一瞬で距離を詰めて、それと同時にローキックを放つ。それを翔流は膝を立て防いだ。だが、何千、何万と蹴り続けた足にはダメージを与える事は出来ない。

続いて突きだされる右の拳。それを左腕の肘鉄で返す。

徹底的な部分破壊。翔流が今行っているのは、『倒す空手』では

ない。『壊す空手』なのだ。

「厭くまで、後の先でくるか。ならば」

小さく呟くソニア。左足を軸に右足を高く上げる。上段の回し蹴りが翔流を襲う。それを待っていたと言わんばかりに翔流の拳がソニアの膝に向かって放たれた。終わったと言わんばかりの渾身の突き。だがそれは翔流の驕りだった。

拳が空を切る。ソニアが途中で蹴りの軌道を変えたのである。そして、ガードもない翔流の脇腹に中段回し蹴りが炸裂した。重い一撃。ソニアがやったのは後の後と言われるカウンターだった。くの字に折れ、苦悶の表情を浮かべる翔流。だがそれで終わりではない。

「まだだ」

ソニアほどの手慣れが、その隙を逃すわけがなかった。怒涛の様に放たれる足技の数々。

二段蹴りから上段回し蹴り、そしてその反動を利用して渾身の突き返し蹴りへとつないでいく。

すべての蹴りが翔流にクリーンヒットし、最後の突き返し蹴りが決まった瞬間、翔流の身体は石畳に叩きつけられた。

突き返し蹴りとは、円を描くような打ち下ろしの蹴りだ。一八〇を超える長身から繰り出された蹴りの威力は凄まじいものだった。

「ぐあっ」

短く発せられた声。その声にソニアは構えを解いた。

「つつ」

必死で痛みを堪えているのだろつ。石畳に叩きつけられたときに頭を打ったのか、額からは血が流れていた。だが、そんな事は関係ないと言わんばかりにゆっくりと立ち上がる翔流。

「まだ立ち上がるか」

「へへ、意外とタフっしょ」

「ああ、その頑丈さは称賛に値する」

「そりゃどうも」

再び構えを取る二人。

「まったく、なれねえ事なんかするんじゃないかった。やっぱりカウンターは趣味じゃねえ」

そう言い残し翔流は地面を蹴る。

右のストレートから左のフック。そして、フックの回転を利用した後ろ回し蹴りへとつないでいく。

「それが君の本性か」

攻撃を受け流しながらソニアが口を開いた。

「本性？ まさか。これからでしょ」

左手のノーモーションを放ちながら翔流が呟く。眉間を狙った一撃。拍子のとれなかったソニアはそのまま顔面に左拳を受けた。

「さあ、覚悟しな」

翔流がノーモーションの左を放ったのは二つの意味がある。一つ

は相手への精神的なダメージ。ノーモーションとは手打ちな為、予備動作が読めない分拳が見えないのだ。そしてもう一つは一瞬のフラッシュを起こさせたかったのだ。

戦いに措いて、一秒でも視界を奪う事が出来たらどれほど戦況が変わるだろう。翔流の顔面への攻撃はそれを実現させていた。

（かかった！）

繰り出される攻撃の嵐。翔流の四肢がソニアを襲う。

「ぐっ」

堪らず身を固めガードに専念するソニア。だがそれは、翔流にとっては好都合な事だ。

右フック、横蹴り、ローキック、裏拳、右アップパー、左ストレート。どの攻撃がどこに被弾しようと構わない。ガードの上からでも構わず打ちつける。

頭突き、肝臓打ち、正拳、膝蹴り、肘鉄。

次第に翔流の息が上がってくる。だが、それでも翔流は息を止める様に連打を繰り返す。すべてはあの一撃の為に。

手刀、裏打ち、スマッシュ、回転肘打ち。次第にソニアのガードが下がり手応えのある攻撃も増えてきた。そして、ガードが下がりソニアの顔面が露出した瞬間翔流は跳躍した。あの大技を繰り出す為に。今日は一度かわされてしまったあの大技を。

ソニアの顔面に胴回し蹴りが炸裂した。崩れ落ちるソニア。翔流の渾身の一撃に湧き上がる会場。

「っはあはあ、どうだ！」

呼吸が乱れる。恐らく今立たれれば勝機は無くなるだろう。満身

創痕とはまさにこの事だろうと実感する。自然と笑みがこぼれた。勝利を確信しハルに向けて手を挙げた。

その瞬間だった。脚に走る衝撃。ソニアの水面蹴りが見事に決まったのである。

首から地面に落ちる翔流。

「くっ、さっきのは中々効いたぞ。翔流」

「……どれだけタフなんだよ」

呆れたように呟く。

「それはお互い様だろ！」

翔流よりも早く立ち上がったソニアが翔流の顔面へミドルキックを叩き込んだ。吹き飛ぶ翔流。

「うあ……」

顔面を抑え、それでも立とうとする翔流。

「翔流よ、素直に負けを認めたらどうだ？」

再び放たれるミドルキックが脇腹に突き刺さる。ボキッと嫌な音が聞こえる。

「肋が折れたか。さあ、負けを認めるか？」

「……嫌だ」

肋を抑えて立ち上がる翔流。

「強情な奴だ。だがそれがいい。君の様な人間は是非部下にしたいものだ」

「ふん、願い下げだ」

「まあいい、これで終わりにしてやる。ゆっくりと眠れ！」

三度放たれたミドルキック。狙いは勿論、折れた肋だ。

（こりゃ、マジで意地を見せないとまずいか）

ドフツと言う音が闘技場に響く。

ソニアの足は翔流の脇腹にクリーンヒットしていた。口からは大量の血を吐きだしている。折れた肋が肺に刺さったのだろう。

「終わったな」

脚を戻そうとするソニア。その時だった。

「捕まえた」

翔流の腕がソニアの脚に絡みつく。

「なっ」

驚愕するソニア、そして対照的に笑う翔流。

「怨むなよ」

翔流はそう言ってソニアの脚を抱きか掛け錐揉み状に回転した。ブチッと言う音が闘技場を静まり返らせた。脚の靱帯をねじ切ったのだ。翔流が最初に翔流がこだわっていた部位破壊。それを最後に

実現したのだ。そして、その拍子にソニア三尉は頭から地面に倒れ込んだ。

「……ドラゴンスクリュー」

小さく呟かれたハルの言葉の一瞬後、闘技場に歓声が走った。失神するソニアに翔流が呟く。

「……俺の勝ちだ」

そう言い残し翔流は意識を手放した。

第一章 その一 異世界と意地（後書き）

修正箇所が多数あったので修正しました。

第一章 その二 激戦のその後（前書き）

一週間でアップとかいっときながら次の日にアップしてますw

まあ、ちゃんと理由があるのですが、理由は今回、この話は次の話と一緒にまとめる筈だったんですけど、思いのほか次の話が長くなっ
てしまい、全部まとめると一四頁とかになってしまうので、区切
りのいいところで仕方なく区切りました。
なので今回は短いです。

そして、今回の話は息抜きの要素となっております。
それではお楽しみください。

第一章 その二 激戦のその後

眼に映る知らない天井。

「……たく。目、覚めたか？ 翔流」

嘆息交じりに呟くハル。

「……またこのパターンかよ。今日はよく気絶する日だ」

眼に映ったハルの姿を確認し、身体を起こしてみるとそこには、アレスとエルノアがいた。

「まったく、お前は無茶すぎなんだよ。神術で治したからいいものの、肋はグチャグチャで折れた肋骨が肺に刺さって肺はつぶれてるし、鼻骨は骨折してるし、重体もいいとこだ」

「……そんなに酷い怪我だったのか」

「そんなに酷い怪我だったのかって、……自覚がないのも考え物だな、翔流。いくら不死になったと言っても痛覚はあるんだろ？ やばいと思ったらやめてくれ、頼むから」

眼の前の幼馴染は怒りから愁嘆へと変わっていった。

「わりい」

「まあ、あそこでお前が負けてたら、これは手に入らなかったけどな」

そう言っただけハルは翔流に一枚のカードと携帯電話を差し出した。

「おめでとう、翔流。お前は今日から三尉だ。これは、お前のＩＤカードだから失くすなよ？ それとそっちはお前専用の携帯な」

ハルの口から放たれた慶賀。それは翔流が勝利したという証だ。

「ソニア三尉はどうなった？」

腕に残る感覚。それと耳に残る音。正直あの技はこの世界では流布していない技だ。どんな事をされるかわからない状態であの技を食らえば、大概は脚の筋を断裂する。そうなければらく動く事などかなわない筈だ。

「もうとつくに神術で治して自分の仕事に戻ったよ」

「そっか」

神術とは本当に便利な物だ。翔流は心の中で思う。

「それと、ソニア三尉からの伝言で次に手合わせするまでに魔術を使えるようにしておけたとさ。めんどくさい奴に惚れられたな」

「実際『この者を是非私の部隊に配属させてください』って懇願されたしな」

「まだ言ってたのか、あの人」

アレスの言葉に翔流は苦笑した。

「まあ、君の所属先ももう決まっている。明日の就任の儀でも発表するが第二神技研究部隊だ。君にはエルノアの下についてもらう事になる」

「エルノアさんの？」

「まずは、翔流にはこの世界の事や、魔素の使い方を学んでいつてもらわないとならない。そしてこの国で魔素を所有しているのはエルノアしかない。そうなれば適任者はエルノアって事になる」
「そっか」

「ビシバシ教えていくから覚悟してね」

エルノアはそう言っただけ妖艶な笑みを浮かべた。ハルが後ろで小さく『ド』と呟いたがその言葉は、翔流には聞こえていなかった。

「それと、これは我がアズラベル軍からの餞別だ」

アレスはそう言っただけ何かの入った封筒を差し出す。その封筒は分厚く受け取ると結構な重量感があった。

「なんですか、これ」

封筒を開けてみるとそこには紙の束が入っていた。

「それはこの国の紙幣だよ。百万ゼント入ってる。それだけあれば必要な物は大概揃えられるさ」

「百万ゼント？」

正直その金額がどれほどの価値を持っているかは分からなかったが、恐らくは大金なのだろう。

「ああ、ゼントっていうのは殆ど円とおなじに考えてもらっていいぜ。種類も一ゼント、五ゼント、十ゼント、五十ゼント、百ゼント、五百ゼントが硬貨で、千ゼント、五千ゼント、一万ゼントで別れる。まあ、日本とは物価が違うから同じどおりに計算すると大分狂うぞ、そうだな物価は日本の十分の一って考えてくれればいい」

つまり、ハルの説明に当て嵌めていけば一千万円分を支給されたという事になる。

「ちょ、そんな金もらえねえよ」

あまりの金額の多さに、慌てる翔流。

「ははは、何慌ててんだよ。この金はお前が軍に入隊する時に発生した基本報酬なんだぜ。お前はそれをもらう権利があるんだよ。この国では志願兵制度を取っててな、入隊した者には入隊金が支払われるんだ」

「そう……なのか」

それにしても百万ゼントは多いと思ってしまう。

（俺って貧乏性なのか？）

なんて考えてしまうが昨日まではしがない高校生だったのだ。別に翔流の金銭感覚は間違っているわけではない。

「それに、お前はこれから必要な物を買そろえて行かなくちゃいけないんだ。金があった方がいいだろ」

「まあ、確かに……」

「ああ、金で思い出したが、毎月給料も支給される。まあ、詳しい話は明日の就任の儀で進めて行こう」

「……はあ」

「さてと。渡すもんも渡したし、動けるか？ 翔流」

「ああ。問題ないと思う」

肋を擦ってみるが痛みは無い。どうやら完全に完治しているようだ。

「じゃあ、次はお前の部屋に案内するからついてこいよ」

まるで自分の事のように高揚するハル。

「今日は、これから忙しくなるぞー!!」

そこには無駄に張り切る幼馴染の姿があった。

「すげえ」

口をポカーンと開く翔流。先ほどまで激戦を繰り広げていた人物とは思えないぐらい間が抜けていた。そして、彼の目の前に広がる部屋。ここはセントラルタワーの五十五階にある一室だ。ハルの話だと、このクラールに勤務するアズラベル軍の兵士は、このセントラルタワーに部屋を持つか、近隣にあるマンションに部屋を間借りして暮らしているらしい。そして、今回翔流はハルとアレスの計らいにより、セントラルタワーの一室を間借りする事になった。まあ、間借りと言ってもセントラルタワーに住む場合は家賃は発生しないらしいのだが。

そして、今翔流達はその部屋を見ているのである。その部屋は、まるで張り替えた直後の様に一遍の曇りもない白を基調とした壁紙と、ピカピカに反射して光沢を放つフロアディング。俗に言うリビングと言う奴だ。そのリビングには、ソファとテーブル、そして机と

ミドルタワー型の端末が設置されていた。そしてキッチンには備え付けの電子レンジと冷蔵庫が完備されている。そして、勿論の事ながら風呂とトイレは別に分かれてた。

「そうか？ 幹部だったらこの部屋は狭すぎる方だぞ？」

「は？ 馬鹿言ってるじゃねえよ。この部屋のどこが狭いんだよ」

驚愕する翔流。その他にも十四畳の空き部屋と、九畳の寝室が付いていた。一人暮らしを想定するには相当広い。そして、それぞれの部屋にご丁寧に端末が付いていた。ハル曰く、幹部はいつでも情報を集める必要があるためだと言っていた。

「私は、これと同じ間取りの部屋が三つあるわ」

「ちなみに俺の部屋は一フロアな」

その時点で既に部屋ではない。その返答に翔流は虚脱感に駆られる。

「俺の部屋は六十階から上が俺の部屋だ」

ちなみに、セントラルタワーは六十八階建てとハルが言っていたのでアレスの部屋は八フロア分となる。話を聞けばそれぞれにマッサージルームやスパ施設、書庫や書斎と振り分けているらしい。アレスに至っては一フロアを丸々戦闘訓練室として設けているらしい。

（……こいつら、規格が違いすぎる）

日本では翔流の部屋は八畳だった。一般家庭ではそれでも十分に

広い方だとも言える。

（寝室に負ける俺の部屋って……）

愕然とする翔流。

「さてと、まずはこれから生活して行く上で欲しい物の調達だな」

ハルはそう言ってポケットからPDAを取り出す。

「えと、生活必需品として、衣服とタオル系は絶対必要だよな」

そう呟いてPDAに入力していく。

「洗濯機と乾燥機は備え付けられてるからいいとして」

ハルの声に驚愕しながら浴室へ走るとそこにはドラム式の洗濯機が備え付けられていた。

（至れり尽くせりってこの事だな）

急に自分の置かれている状況が怖くなるがとりあえずリビングに足を向ける。

「だから、テレビは五十型以上は絶対必要だつて！」

「そんな事よりも音響システムにこだわるべきよ！」

「それだったらいつそプロジェクターにしちまえよ！」

三人は、どうでもいい事で口論していた。

「……俺の部屋なんだけどなあ。もつと質素でいいんだけどなあ」

呟くが翔流の声は三人には届いていなかった。

日は既に沈み街は闇に包まれていた。街は、自然の光を失えば、人工的な明かりを発する。煌々と輝く街灯やネオンの明かり。

「あゝあ。すっかり夜になっちまったよ」

「まったくだ。さあ、買うもの買ったしさっさと帰ろう」

呟くアレスとハル。二人のその姿は、疲れ切っていた。それもそうだろう、二人の手には大きな荷物がぶら下がっていた。もちろん翔流の両手にもぶら下がっている。

それらは翔流の生活必需品や服、そして靴などが入っていた。

「つて、どうした翔流？」

「あ、いや。やっぱすげえなつて」

今日、何度めの感嘆だろう。翔流の視線の先にはライトアップされたセントラルタワーが映し出されていた。

「つか、今気がついたけど、この防壁みたいなので区画ごとにあるんだな」

「ああ。この街全体が要塞都市だからな。ほら防壁の横にでかいピ

ルあるだろ」

ハルが指をさす。その先には他のビルよりも明らかに高いビルが建っていた。

「あれってさ、皆の役割を果たしてるんだよ。この街は各ブロックで別れてるからさ」

ちなみに今いるのは、商業・商売エリアである。この街は大きく分けて三つのエリアで構成されていて商業・商売エリア、工業エリア、住宅エリアとなっている。それぞれに巨大な防壁があり、敵の侵入や攻撃に備え即座に対応出来る様に皆の役割を果たすビルが一つのエリアにつき三つほど作られていた。

「ふうん」

改めて街を見てみるといろいろな所に戦争の産物ともいえる物が見える。防壁から突き出す大砲やサーチライト。そしてセントラルタワーを護るように建設された建物の数々。改めてこの国は戦争をしているという事を認識する翔流。

「まあ、外には結界もあるしな。ここが攻め込まれるような事は先ずねえよ」

「そうなのか？」

「多分ここが攻め込まれたらこの国はお終いだと思っただい。それぐらい綿密な防壁や結界を張り巡らせているんだ」

アレスをそこまで言わせる鉄壁の護り。よっぽどその護りには自信があるのだろう。

「まあ、そうじゃなくてもうちには優秀な兵士達がいるからな。期待してるぞ、翔流少年……いや、翔流三尉」

まだ、あまり聞きなれていない自分の階級に少し鳥肌が立つ。

「はあ、やれるだけはやってみます」

何とも覇気のない翔流の返答。

「まあ、早いとこ千芹を奪還できるように頑張れよ」
「ああ」

（きつと千芹はもつと辛いよな）

翔流にはハルがいた。だが千芹は見知らぬ土地で孤独なのだ。周りは自分の事を魔王とあがめるだろう。だが、その国には千芹の理解者は誰もいない。

（絶対助けるからな。千芹）

その為に、一刻も早く魔素を操れるようにならないといけない。自分の中にあふれる魔素。翔流にとって、今はそれだけが望みだった。

第一章 その二 激戦のその後（後書き）

前書きにも書きましたが、今回は短く終わりました。

今回はまた一〇頁ぐらいのページ量になると思います。

それと、最近アクセスが急に伸びるようになりました。この場を借りてお礼を言わせていただきます。こんな稚拙な文章ですが、読んでくださった方、本当にありがとうございます。

これからも頑張って書いていくので応援よろしくお願いいたします。

第一章 その三 世界情勢と派閥争い（前書き）

なんか間違いが多いなと思ったら一昨日バックアップで取った校正前の奴をアップしてしまいました。必要な所に文字がなかったり、寝ぼけて書いていたときに一人称になっていたのを直さなかったりと踏んだり蹴ったりでしたが、ようやくちゃんと直せました。何かおかしな所があったら指摘をお願いします。

第一章 その三 世界情勢と派閥争い

「翔流三尉」

就任の儀を終えた翔流は、聞きなれた声に呼びとめられた。呼ばれられないその言葉に背中がむず痒くなり、全身に鳥肌が立つ。仕返しにと言わんばかりに翔流は声の主に万弁な笑顔で返した。

「なんですか、ハルト将補」

「うおう、気持わりい。翔流が俺に敬語だ」

翔流に言われ、ハルも鳥肌が立ったのだろう。結果、二人で爆笑した。

「つたく、お前等は……」

呆れたアレスが二人に促す。

「だってよお、こいつが軍服来てるんだぜ。可笑しくてしょうがねえよ」

「馬鹿言ってんじゃないよ。お前だって軍服にあわねえじゃねえか」

今現在二人の服装は、黒を基調とした軍服に身を包んでいる。基本的に軍内では軍服が義務付けられているのだ。

「で、どうしたよ？ まさか笑いに来たわけじゃねえよな」

「まさか。俺もそこまで暇じゃねえよ。お前これからエルノアの所に行くんだろ？」

「ああ」

これから翔流が向かっている先、それは第二神技研究部隊の研究室だ。一応、昨日の内に場所は教わっていたので一人でも向かう事が出来た。

「俺とアレスはこれから文官との会議があつてちよつと手が外せねえんだ。悪いけどこいつをエルノアに届けてくれねえか？」

「ああ、別にいいけど」

ハルから手渡される紙の束。それは結構な重量があつた。

「重いな。何の書類だよ」

「とりあえずヒミツって事で。エルノアにでも直接聞いてみな。きつと顔を顰めながら教えてくれるぜ。じゃあな」

片手をあげて反対方向へ歩いて行くハルとアレス。

「つたく。一番最初の仕事がパシリかよ」

呟きながら脚を進める。

「……けつ、魔族の癖に」

途中ですれ違う兵士達は皆、翔流を一瞥した後、明らかに不服な態度を示している。

（三尉になつても、俺の扱いは変わらないのね）

この国の兵士達から見た翔流の扱いは、厭くまで魔族。それはどんな肩書がついても変わる事はない。

「見るよ、あいつ。昨日ソニア三尉と戦った魔族だろ？ 凄かったよな、あの試合」

「ああ、しかもあの魔族は俺達と一緒に戦ってくれるんだろ。敵に回るよりずっといいよ」

だが昨日のソニア三尉との激戦で考え方を変えてくれた人間がいるのも事実だ。

「つたく、めんどくせえな」

既にこの国に来てから口癖になった独り言を呟き、翔流は第二神技研究部隊の研究室に足を進めた。

——コンコン。

乾いた音が響く。翔流がドアをノックしたのだ。

「どうぞ」

ドアの奥から声が聞こえる。ドアの所為で籠ってはいるが知っている声。エルノアの声だ。

「浅葱三尉入ります」

昨日教わった最低限の軍人としてのルール。それは、自分が誰であり階級はなんであると伝える事だそうだ。そして、翔流はそのルールを実行しドアを開けた。

「……うわ」

思わず、声を漏らす。そこは、まるで会社のオフィスの様に机が並べられ、窓際には観葉植物が揃ってある。そして、部屋の奥に一つだけ孤立した机にエルノアがいた。そして、翔流に向けられた複数の視線。

「第二神技研究部隊へようこそ、翔流君」

固まっていた翔流にエルノアは手招きをした。

（転校生っていうのはこんな気持ちなのかな）

呼ばれるがままにエルノアの元に足を運んだ。

「彼が、さっき言っていた浅葱翔流三尉よ。彼は、今日からこの第二神技研究部隊に所属する事になるわ。皆、よくしてあげてね」

エルノアの言葉に各位、短く『はっ!』と呟いた。ざっと見たところこの部隊はエルノアを含め四人。自分も入れれば五人だ。

（……少ない）

部隊と言うよりも小隊といった感じだ。

「どうしたの？ 翔流君」

「いや。自分の配属された所は、結構人数少ないんだなと思って」「そうね、うちは少数精鋭なのよ。この部隊は誰でも入れるような安い部隊じゃないの。この部隊は神素と魔素に関するスペシャリストが集められた部隊なの」

「……スペシャリスト」

そんな部隊に自分が来ていいのだろうかと軽く苦悩する。

「具体的に、この部隊の任務は新しい神魔混合術ハイブリット・スベルの開発がメインになるわ。神魔混合術っていうのは、後で説明するけど簡単にいえば神素と魔素を掛け合わせた術よ。昨日、貴方の世界で使った術も神魔混合術の一種ね」

エルノアの言葉に昨日の事を思い出す。翔流の世界を止めた魔法。自分の魔素にハルの神素を合わせて時を止めたと聞かされていた。つまり、翔流が加担したのは神魔混合術だったという事だ。

「本当は、貴方の魔素が暴走しなければ、私が術者になっているはずだったんだけどね」

「はあ、申し訳ないです」

「気にしないで。ああ、それと。これは皆に忠告ね。今後この部隊に所属している間、彼を魔族と言った奴。後で刑罰が下るわよ。心得ておきなさい。彼は好きで魔族になったわけじゃないの。それに彼の階級は三尉。私の次に権力を持っているからその辺は各自考える様に」

部屋の空気が凍る。それだけエルノアの威圧感が強いのだろう。

部屋にいた兵士は慌てて『はっ!』と返事を返した。

「ちなみに、基本的に私達は非戦闘員なの」

非戦闘員という言葉に、少しだけ安堵した。

「まあ、昨日みたいに緊急の要請で任務に同行する場合があるから、

必ず安全とは言えないんだけどね。まあ、その場合は呼ばれるのは私だけになるわ。翔流君は彼らと同じく非戦闘員扱いよ」

と言ってエルノアは兵士達に視線を促した。

その面々は個性的と言ってもいいだろう。

「せっかくだし、皆に自己紹介してもらおうか」

エルノアの言葉に兵士達は『はっ！』と返事を返した。

「では、自分から紹介させていただきます」

そして、おもむろに一人の男が口を開いた。顎鬚を蓄え黒い髪の毛をオールバックに整えた見るからに紳士な男だ。

「自分は、ラクティ・グレン・ヴァルディアです。階級は准尉。よろしくお願いします、翔流三尉」

「よろしく、ラクティ准尉」

名前で三尉と呼ばれたのは恐らくエルノアが翔流君と呼んでいたからだろう。だからこちらにも名前で呼び返す。

「ラクティ准尉は、カードリッジをはじめとする魔工具生成の第一人者ね。この国の魔工具の試作品には、大体彼が関わっているわ。今は神魔混合魔術を使った魔工具を開発するためにこの部隊に入ってもらったの」

「へえ」

やはり、スペシャリストと言うのは間違いではないようだ。

「じゃあ次は、私が」

次に口を開いたのは、見るからに若い女の子だった。まだ幼い顔立ちに不釣り合いにかけられた眼鏡。白に近い銀髪を肩で切りそろえていて、それがさらに少女を幼く見せた。見た目だけでいえば翔流よりも全然若い。

「私は、アズマリア・ステリアスです。階級は二曹。よろしく願います」

少女はそつけなく答える。

「アズマリア二曹は、この軍で最年少の兵士よ。今年で十四歳だったけ？」

「十五です」

アズマリアは小さく、そして短く答えた。どうやらあまり社交的ではないらしい。と言うか、心なしか顔が赤くなっている。もしかしたら極度の人見知りなのかもしれない。

「ああ、そつか。ごめんなさいね。まあ、いいわ。さっきの続きだけど、神素のに関する事だったら、この国で彼女に勝てる人間はハルぐらいよ。階級は年齢の所為で二曹だけど、年齢がなければ、三佐ぐらいの貢献はしているわね」

「三佐って、……すげえな」

眩き少女の顔を見る。やはりまだあどけなさが残っている。それを、実力で国に貢献したのだ。それだけでも凄まじい才である。

「じゃあ、最後は俺だな」

最後に聞こえてきた声はとても軽い声をしていた。一言で言ってしまうえば限りなく陽気。その声だけで、まるで最初からそこにいた様な安心感を持たせる様なそんな不思議な声だった。

「俺は、サイト・リファレンス。階級は、曹長。よろしく！」

パチツとウインクするサイト。軍服をうまく着崩し、茶色い髪の毛は後ろで一本に結っていた。

「サイト曹長は、こう見えても術式を構築するスペシャリストなの。後で詳しく教えるけど、神術っていうのは主に術式を利用して術を発動させるの。ほら、ハルの魔法陣とか出してたの覚えていない？」

「ああ、覚えてる」

昨日、ハルは事ある毎に、魔法陣を出現させていた。忘れるわけがない。

「あの魔法陣は構築式って言って、それに神素を通す事で術を発動させているの。彼はその術式に関する事だったら恐らくこの軍でもトップクラスね」

「いやだねえ、姉さん。おだてても何も出ないよ」

「ただ、問題点としては馬鹿な事ね」

溜息をつくエルノア。一方、サイトの方はそれを見て笑っていた。

「とまあ、こんな感じかしらね」

「なるほどね」

第二神技研究部隊と言うのは、中々曲者揃いの職場と言った感じだった。

「じゃあ、翔流君。あそこが君の机だから。好きに使って頂戴」

そう言つてエルノアが指をさす。そこには何も乗っていないままさらな机が用意されている。配置的にはアズマリアの横、サイトの正面だ。

「了解です。あつと、そうだ。エルノア一佐」

「エルノアでいいわよ。一佐なんて呼びにくいでしょ。それに、敬語なんて使わなくてもいいわよ。もっと友達に話しかけるようにしてもらつて構わないわ」

「そっか、そっちの方がやりやすいから助かる」

昨日既に、友達のように話しかけていたのだから敬語を使われると逆にやり辛いのだろう。

「これをハルから預かってきた」

翔流はそう言つてエルノアに書類を渡す。

「……え」

凄まじい速さで書類に目を通すエルノア。そこにはハルの言った通り、顔を顰めるエルノアがいた。

「どうしたんですか？」

心配そうにアズマリアが口を開く。

「いいえ。優しい将補から皆にお仕事が届いただけよ」

「つて事は、新しい術式とその検証つて事？」

サイトの言葉にエルノアが頷く。その反応を見て頂垂れるサイト。

「はっはっは。皆さん大変ですな」

「勿論、ラクティ准尉宛の書類もありますので大丈夫ですよ」

「ぬっ」

言葉を失うラクティ准尉。

「まあ、私はこれからしばらくは翔流君の教育係と言つ役があるので、仕事はそれぞれに振り分けておきます。それでは、今日も一日頑張りましょう」

エルノアの言葉に全員が動き始める。そして、すぐに仕事に取り掛かった。

「まずはこれをみて」

広い空間に木霊する声。

ホワイトボードに張られた一枚の地図をエルノアが指さす。

エルノアが仕事を振り分けた後、二人は勉強の場所を会議室へと移し、只今絶賛お勉強中なのだ。

「これから翔流君にはいろいろ学んでもらうけど、まずはイグニリアスがどんな所でどんな人たちがいるのかを学んでもらうわ」

「はあ」

「まず、イグニリアスには四つの大陸と、十の国で構成されているの」

地図を指差し説明していくエルノア。

「その世界を構成している大陸はルード大陸、ルカン大陸、ネノレ大陸、キドウ大陸の四つよ。アズラベルがあるのはこのルカン大陸ね」

そう言ってエルノアが一番大きな菱形の大陸を指差した。

「このルカン大陸には、四つの国が存在しているの。私達が今いるアズラベル国。千芹ちゃんがいるダーゼルム国、私の故郷のテイル国、禍族の住むビグラーツ国の四つね。本来は他の大陸の国も覚えなきゃいけないんだけど、時期が来たらまた教えるわ。今はこの大陸の事を覚えていきましょう」

「……はあ」

「めんどくさいと思うかもしれないけど、この世界で生きていく上で必要最低限の知識よ」

確かにその通りである。見知らぬ土地でまず一番欲しいものと言えはその土地の知識だ。ただハルに任せておけばいいという話でもないのだ。自分でも出来る限りの事はしたい、その為にはまず、必要最低限の知識は絶対なのだ。

「まず、私達が居るアズラベル国領土。それはここからここまで」

そう言っただけ地図を青いペンで塗っていく。菱形の上の部分が青に染まる。菱形の中にいびつな円錐の形が出来上がった。

「アズラベルはこの大陸で一番大きな国だね。ルカン大陸の五分の二が領土なの」

そして残った部分を赤と黄と緑で塗りつぶしていく。菱形の下の部分から円錐のちょうど中心で針の様に位置する赤い領土。緑と黄の領土がその針が他の領土を囲むように記されていく。

「赤がダーゼルム国。黄がテイル国。緑がビグラーツ国の領土ね」
「へえ」

こう見るとアズラベルと言う国は本当に大きい。戦争も優勢に進めているのと言うのもわかる気がする。

「それで、その領土内にそれぞれ街があるって感じね。ちなみに、私達がいるアズラベルの首都クラールはここね」

円錐のちょうど真ん中あたりに打たれた点。その点はこの国からも均等に離れていた。

「このクラールはアズラベル全軍の司令塔と考えてもいいわね。だからどの国からも攻撃しにくい中心に作られているの」

「へえ」

「どう？ ちょっとは理解できた？」

「なんとなくは」

少なくとも自分がどこにいて、何処を目指すかぐらいは理解できる。

「じゃあ、次は気分転換で種族の事を話そうかしら。この世界には大きく分けて四つの種族がいるっていうのはハルから聞いてるわよ

ね」

「ああ。神族、魔族、龍族、禍族だよな。神素を身体に宿したのが神族で、魔素を身体に宿したのが魔族。そしてその両方を持っているのが龍族と禍族なんだよな」

「そう、その通り。でもね、正確に言えばこの世界に存在する種族は実は五種類なの。神族って言うのは元々神素をもった二つの種族から構成されているの。その二つの種族と言うのは精霊とマトレ族。この二つの種族はお互いに足りない物を共有し合い発展してきた。精霊は術を、マトレ族は文明を。だから、一口に神族とっても二つの種族をさす事になるのよ」

「へえ」

言われた事をノートにメモしていく翔流。

「神族は見た目こそは変わらないけど、精霊とマトレ族には大きな違いがあるの。精霊はマトレ族に比べて長寿なのよ。マトレ族の寿命が八十年だったとして、精霊はその三十倍は生きるわ」

「三十倍……二四〇〇年かよ」

想像もできない年数だ。

「ちなみにアレスは精霊王と呼ばれて、精霊を統べる家計に生まれたの。だからアレスも、長寿で今年六五〇歳になるわ」

「へえ。じゃあ、ハルも精霊なのか？」

「いえ、ハルはマトレ族と精霊の掛け合わせよ。残念なことに彼は長寿にならなかったの。その代わり、この世界で一番神素を多く持つ存在になったわ」

「へえ」

スラスラとペンを走らせていく翔流。とりあえず幼馴染は普通の寿命だったらしい。

「詳しい話はハル本人に聞いてみなさい。きっと教えてくれるから。次に魔族の説明ね。魔族はその名の通り魔素を身体に宿している種族ね。翔流君も今は魔族の扱いになるわ。魔族はその身体の一部がマトレ族や精霊とは違うの」

「うん。それは何となくわかる」

カーンを見てもそれは分かる事だった。あの岩の様な手先と耳。あれは明らかに人とは違う。

「千芹ちゃんは多分あっちの世界で生まれたから変異しなかったのね。でも、しっかり魔王としての証を持って生まれた。この世界では紅い髪と紅い眼を持った人間は魔王と守護兵しか居なかったのよ。つまり、この世界で紅い髪と紅い眼を持つてるのは、翔流君と千芹ちゃんの二人だけって事になるわ」

「……だからか」

自分の正体を明かした訳でもないのに全員が翔流の事を魔族と認識していた。翔流はそれが不思議でしうがなかったのである。

「ん？ ちょっと待ってくれ。じゃあ、前の守護兵はどうなったんだ？」

「もうとつくに死んだわよ。魔族の寿命はせいぜい四〇〇年だもの。マトレ族よりは全然長寿だけだね」

「……あ、そなんだ」

「ええ。恐らくけど千芹ちゃんもそれぐらいは余裕で生きるんじゃないかしら」

「……マジで？」

絶句だった。もし、千芹がこの世界とは無関係にそのまま暮らしていたら大変な事になっていただろう。

「ええ。魔族の寿命は身体の魔素によって変わるの。魔素が多ければ多いほど身体の細胞が活性化されて長寿になるはずよ」

「じゃあ、俺も死ななければ相当長生きだった？」

「うーん、それはなんとも言えないわね。翔流君はカーンが来なければ覚醒しなかったわけだし」

「……なるほどね」

「でも、安心していいわよ。龍族も相当長生きだから」

「え？」

「龍族の寿命は平均で一〇〇〇歳は生きるわ」

「一〇〇〇歳って。じゃあ、エルノアさん今いくつなの？」

自分の寿命にかかわってくる事なのだ。自然と言葉が強くなる。

「あんまりレディに向ける会話じゃないわね。でもいいわ、私は一九二歳よ」

「……一九二歳って若いのか？」

「うーん、私の年齢をマトレ族で置き換えれば一九歳ぐらいよ。彼らの一歳が私達の一〇歳と同じ感覚だから」

長生きにもほどがあると突っ込みたいところだが、突っ込んだところでその寿命が変わるわけでもないので止めておく。

「じゃあ、その流れで龍族の説明をしてあげる。まず、龍族の特徴はこの角かしら」

エルノアはそう言って自分の頭の角を指差した。

「私達の祖先は龍だったと言われているの。この角がその名残だと言われているわ。そして膨大な魔素と神素を身体に持つオリジナル

の種族が私達龍族よ」

「オリジナルって、禍族も神素と魔力を持つてるんじゃないのか？」

「あゝ。じゃあ、禍族の説明も一緒にしてしましましょう。禍族と言うのはね、マトレ族によって作られた種族なの」

「作られた種族？」

「多分そっちの世界にもあったんじゃないかしら。クローン技術よ」「クローン？」

「ええ。禍族とは龍族をベースにマトレ族が作り出したクローンが自立し作り上げた種族よ。名前の由来は禍人まがつひとから来てるって言われているわね」

「へえ」

「彼らは私達龍族に比べて、寿命も持っている魔素、神素の量も少ないのよ。よく言えばハイブリット、悪く言えば中途半端な種族ね」
「なるほどね」

「まあ、種族に関してはこんなものかしら。っとそろそろお昼ね。何か質問はある？」

「ああ、あると言えばある」

「なにかしら」

「基本的に、このイグニリアスのどの大陸にもさっきの種族しか居ないんだろ」

「ええ、そうね」

「じゃあ、他の大陸の種族はどうしているんだ？ 皆戦争しているのか？」

ふとした疑問だった。元々は神族と魔族の戦争なのだ。他の国だつて戦争していてもおかしくない。

「いいえ。同じ種族で同盟こそ組んでいるものの、他の大陸にある国は戦争には参加していないわ」

「同じ種族が戦っているのに？ なんで？」

「簡単よ。誰が好き好んで戦争に参加するのかしら？ 同盟こそ結ぶものの基本他の国は、傍観者よ。だから今戦っているのは純粹にアズラベルとダーゼルムって事になるわ」

「ふうん。なんか素っ気ねえのな。同じ種族なのに」

「どの国も自分の国を防衛する事に必死なのよ」

「なるほどね」

「さて、他に聞きたい事は？」

「特には」

「そう。じゃあ、食堂に行きましようか。案内してあげるわ」
「了解」

立ち上がるのと同時に軽く身体を伸ばす。

「さあ、行きましよう」

「はいはい」

会議室を後にする二人。この国の事、種族の事、その他にも覚える事がたくさんありそうだ。翔流はエルノアに気づかれない様に溜息をそつと漏らした。

翔流の目の前に湯気を立てる、スパゲティミートソースと一切れのパン。

「どうしたの？ 翔流君」

エルノアの目の前にも同じメニューが並んでいた。

「いや、スパゲティだ」

その二つがあるという事は、この世界には小麦の存在があるという事だ。

「スパゲティ？ これはラスタと言う穀物を粉状にして作った麺状にしたニクスと言う麺よ」

「……ニクス」

フォークに巻き付けニクスを口の中に入れる。口の中に広がる肉の風味とトマトの風味。そして間違いなくパスタの食感。

「……スパゲティだ」

間違いなくスパゲティミートソースだ。

「これ、俺達の世界ではスパゲティって言うんだ。小麦って穀物を粉状にして麺にしたもんなんだけどさ。今食べて確認したけどまったく同じだ」

「へえ。じゃあ、呼び名が違っただけで同じ穀物なのかもしれないわね」

そう言ってエルノアはパンをちぎり口に放り込んだ。

「ってか、多分穀物だけじゃなく殆どの物が呼び方が違っただけで同じな様な気がする」

このミートソースに使われたトマトも、恐らくは呼び方が違うだけなのだろう。

だが、それが翔流にとってはすごくうれしい事でもあった。呼び方が違っただけで元の世界の慣れ親しんだ味に戻るのだから。実際、

この世界に來た時は正直、食生活は諦めていた。それは外国に行くのと同じで自分の口に合う料理を探さなくてはならない。そういった意味では、人間は慣れ親しんだ味と言うのは非常に重要になってくる。それがまた食べられると思うと、この世界も悪くない。人間の三大欲求の一つなのだから当然と言えば当然か。

「今度探してみるのも悪くないかもね」

「そうだな」

そう言つて二クスを口に入れる。その味はやっぱりスパゲティだった。

そんな、小さな感動に浸っているとエルノアの表情が変わつたのが分かつた。

「どうしたの？ エルノアさん」

「いや、……嫌な奴が來たなと思つて」

エルノアの視線を辿るとそこには三人の男がいた。一人は大柄で如何にも我的強そうな男。後の二人は如何にも取巻きと言つた感じの男だつた。

「誰、あいつ？」

「ハルの部隊の下士官よ。あいつとは同期なんだけどね。生理的に受け付けられないのよ。早く何処かに消えてほしいものだわ」

「へえ、エルノアさんでもそう思う事はあるんだ」

「まあ、ね」

だが、エルノアの思いも空しく、男達はこちらへ足を向けた。

「これはこれは。異族同士仲良くランチときたもんだ」

「あ？」

思わず男を睨みつける。男は下種な笑みを浮かべていた。

「……翔流君。あんな奴、相手にしちゃダメよ」

「分かってる、こういう下種な奴はほとくのが一番なんだ」

翔流は威嚇の意味を込め、言葉に棘を持たせた。

「あ？ 下種だ？」

売り言葉に買い言葉。張りつめた空気が流れる。

「下種に下種と言って何が悪い。木偶の坊」

その空気は臨戦態勢を作るには十分すぎるものだった。そんな翔流を見てエルノアが小さくため息をつき口を挟んだ。

「何の用かしら、バズー准尉」

凜とした声だった。そして少しながら怒気を含んだ声。そんな声がああエルノアから発せられたのだ。その声は一瞬にして翔流を冷静にさせた。

「いや？ 俺達は食堂に飯を食いに来ただけだぜ。そしたらなんか食堂がくせえんだよ。それで調べてみたらこんな場に異族の二人組がいるわけよ。しかも一人は魔族ときたもんだ」

だが、バズー三尉はお構いなしで挑発を続ける。

「ふうん？ それで？」

言葉に怒気が強くなる。

「ちょっと、エルノアさん。落ち着こうぜ」

いつの間にか立場が逆転した二人。翔流は慌てて仲裁に入る。

「だからよお。原因を作ってるその魔族にはご退場願いたいわけだよ。分かるか？ エルノア」

「同期だからって気安く呼び捨てにしないで頂けないかしら？ 私は一佐よ。バズー准尉」

「ああ？ 手前、ハルト将補に気に入られてるからって調子に乗ってんじゃねえぞ」

「そのハルト将補にも気にかけてもらえない癖にしゃしゃり出てくるんじゃないわよ。木偶の坊！」

「なんだと、こらー！」

ついにバズー准尉がキレた。鳴り響く轟音。バズー准尉が机を蹴り飛ばしたのである。引っくり返る食器類。勿論、翔流達が食べていたスパゲティも例外ではない。

立ち上がるエルノア。

「喧嘩なら……」

『買っわよ』と続くはずだった。

「手前！ 何してくれてんだよ、俺の飯をよお！」

スパンと小気味のいい音がした。翔流のハイキックがバズー准尉の顔面に炸裂したのだった。不意を突かれたバズー准尉はそのまま

崩れ落ちる。

「兄貴！」

「旦那！」

「クソ弱え野郎が威張り散らしてるんじゃないよ。見てて腹立つ。行こうぜ。エルノアさん」

「え、ええ」

戸惑うエルノアを促し食堂を後にした。

「つたく、神族って言うのは根性が腐ってるのが多いのかね」

不貞腐れる様に愚痴る翔流。眼の前に広がる広い空間。昨日、激戦を繰り広げた闘技場に二人はいた。魔素のトレーニングをするためだ。

「ごめんなさい」

不意に謝られる。

「なんでエルノアさんが謝るのさ。悪いのはあのバズーとかいう木偶の坊だろ」

「そうだけど……不快な思いをさせたのは確かだもの。だから、ごめんなさい」

「そんな、謝らないでよ。そこまで気にしてないよ。ただ、エルノアさんはいつもあんな思いしていたの？」

異族。神族だけの世界にとって明らかに自分達は異質の存在だ。

「あ、いや。……そうね」

エルノアは否定しようとして途中でやめた。

「正確にはちよつと違うの。私が龍族だからバズーは絡んできた訳じゃないの。ちよつどいいから、翔流君に教えておくわ。この国は横の統制は最悪よ。特に派閥争いなんて酷い物だわ。バズーの奴はハルの部隊にいるけどあいつは文官のゲルツ財務大臣の派閥だからよく私に喧嘩を吹っ掛けてくるの」

「は？ 派閥？」

「ええ。この国にはいくつかの派閥があるの。細かいのを合わせればたくさんあるけど大きい派閥は三つ。一つはアレスとハルの派閥。一つはゲルツ大臣の派閥。一つは武官ラクサ三佐の派閥」
「ラクサ三佐って昨日、ハルに反対してた人だよな」
「ええ」

元々派閥争いがあつたのなら昨日の態度も納得がいく。

「大変なんだな。ハルも。まあ俺には関係ないけど」

「大変なんだなって、貴方もアレスとハルの派閥って周りからは思われているわよ」

「マジで？」

顔を顰める翔流。

「また面倒くさそうだなって顔に出てるわよ」

「面倒くさそうじゃなくて面倒なの。ったく、横の統制ぐらいとれよな、あのバカ」

「本当よね」

エルノアはそう言って笑った。

「まったく。これじゃ、魔素の練習なんて集中出来たもんじゃない。翔流君。半休使って気分転換に街に行こうか。昨日買えなかった物もあるしちょうどいいから揃えてしましましょう」

「おいおい、いきなりサボりかよ」

「サボりじゃないわよ。私の気分転換です」

「それをサボリと言っくんじゃ」

「上官命令」

「……酷い上官だ」

「ちなみに拒否権は有りません。上官命令ですから」

『べえっ』と舌を出すエルノア。

「まったく。しょうがねえな」

翔流はそう言って笑った。

第一章 その三 世界情勢と派閥争い（後書き）

分かりにくい文章ですいません。

あまり知識がないくせに国際情勢とか、国内情勢とか入れた結果こうなりました。

出来るだけ、砕いて書いたつもりですが伝わるかが不安です。
何か指摘があったらよろしく願います。

第一章 その四 神術と魔術（前書き）

とりあえず、前回と今回の話でアズラベルの事と神術、魔術についての説明は終わります。

ようやく次回から普通の話に戻る。

長く説明になって申し訳ありません。

長い割には設定が薄い気もしますが、突っ込みどころ満載な上月流ファンタジーをお楽しみいただけたら幸いです。

第一章 その四 神術と魔術

「まずこの世界の神術、魔術……まあ、両方をひっくるめて魔法と呼ばれているんだが、その原理って言うのは、この前説明したよな」

闘技場に不自然に用意されたホワイトボード。そのホワイトボードに書き込まれていく文字。今日、先生として教鞭を振るっているのはハルだ。昨日は、結局街に買い物に繰り出してしまったので、実質魔素の演習はこれが初めてになる。そして、今は術に関する最低限の知識を詰め込んでいる真っ最中なのだ。

「ああ、神素と魔素をエネルギーとして発動してるんだよな」

もう幾度となく聞いたフレーズ。翔流の中では既に、忘れるにも忘れる事の出来ないフレーズになっている。

「そうだ。神素って言うのは、身体の中にある神核細胞によって作られるんだ。同じく魔素って言うのは魔核細胞によって作られる。この二つの細胞は元々、この世界で人間が生きて行くうえでの防衛的進化を遂げた物なんだ。この世界の大气には、微量だが、天然の濃密な神素と魔素が漂っているんだ。その神素と魔素を神魔源素と言うんだが、その神魔源素と言うのは神核、魔核細胞を持たない人間の体には、負担をかけるものでしかない。そこで人間が進化して身につけたのが神核、魔核細胞なんだ。神核、魔核細胞は、その吸い込んだ神魔源素を分解し再構築する。それが神素であり魔素となるんだ」

「ほうほう」

「まあ、正直ぶっちゃけたことを言うと、神素と魔素って言うのは、副産物に過ぎないものだったんだ。だが、先人達はそこから知恵を

つけ自分の中にある神素、魔素の存在に気がつき、神術、魔術を展览展示させていったのさ。まあ、あっちの世界には神魔源素なんてなかったし、それに代わる物質もなかったからな。だから魔術と言う概念は衰退して、科学が発展したんだろうな」

「ふうん。なるほどね」

「ちなみに神核細胞及び魔核細胞は、それぞれ神蔵、魔蔵と言うエネルギー貯蔵タンクを持ち、そこに神素なり魔素を貯め込む事が出来るんだ。そのタンクの大きさが個人の持つ許容量になる。俺や千芹、それにお前は貯蔵タンクの大きさが馬鹿でかいんだ」

「へえ」

さすがにこの世界に来て三日目ともなると大概の事には驚かなくなってくる。翔流もようやくこの世界に順応してきたという事だ。

「じゃあ、せっかくなんでちょっと質問いいか？」

「おう、なんでも聞いてこいや」

「さっき、貯蔵タンクがあるって言ってたけど、それを考えると、魔素にも使える限度があるって事だよな」

「お、考えてるねえ。興味津津？」

嬉しそうにハルが言う。

「まあ、な」

元々自分の世界では、ゲームや漫画でしか出てこない俗に言う『ファンタジー』の世界を自分で体験できるのだ。少なからず興味は湧く。

「答えはある。まあ、神素でも魔素も放出量にもよるが、当然、神素、魔素の変換量を超えれば当然タンク内の神素、魔素を使う事に

なる。そのタンク内の神素、魔素を使いければ当然回復するまでは使えなくなる」

「ふうん。じゃあ、次の質問」

「おうよ」

「俺が、覚醒した時にあそこのエントランスに魔素があふれたよな」
「ああ」

「あの魔素は何処から生まれたんだ？ あっちの世界には神魔源素なんてないんだろ？ 当然俺は守護兵に成りたてだ。さっきの話を当て嵌めると、魔素なんてあるわけがねえ」

「おお、鋭い所を突いていくねえ。まあ、理由は簡単さ。翔流がカーンの魔素をそのまま吸収したんだよ。後は、お前のタンクが空になるまで一気に放出したんだ」

「なるほどね。ちなみに聞くけど今は俺の魔素って言うのはどうなってるんだ？」

「まあ、神魔源素の変換って言うのは呼吸と共に自然に行われてるものだ。大体一日もあれば全回復してるよ」

「ふうん」

納得したようにノートにメモをしていく翔流。その姿はまるで受験生の様だった。まあ、この世界で生きていくための知識なのだから当然と言えば当然だろう。

「んじゃ、次な。今度は神素と魔素についてどう違うかを説明していくわ」

「おう」

「まず、神素と魔素は術の発動エネルギーである事は変わらないが、神素と魔素には明確に違う点が一つある。それは自己点火の有無だ。自己点火って言うのは、起爆スイッチみたいなもんだな。俺達を使う神術と言うのは、必ず魔法陣を必要とする。それは、神素には自己点火能力がなく、神素単体では神術を発動することが出来ないか

らなんだ。だから神術と言うのは、術の発動イメージを練り上げた構築式という魔法陣に神素を流し込む事で、初めて行使する事でできる技術なんだ。ちなみに、構築式はカードリッジに入れてある物だから俺達、親族はカードリッジを手放す事が出来ない。対する、魔術は、自己点火能力を備えている。魔素を放出し、行使したい魔術のイメージを作るだけで発動する。あの時、翔流の魔素が魔術にならなかったのは、放出しかしていなかったからなんだ。もしあそこで爆発なんてイメージしてたら、俺達は今ここにはいないだろうな」

「なるほどね」

「まあ、こんな事口で言われても理解しにくいと思うんだ。翔流も俺達の戦いを一度見てるけどあの時は何も理解してなかったもんな」
「まあ、そうだな」

「だから、これから神素と魔素を理解してもらおう為に、エルノアと俺で模擬戦を行う。そこで神術や魔術がどんなふうに発動するのをよく分析してみてな」

「ああ。うまくいくかは分からないけどやってみる」

「大丈夫だって、特徴だけとらえればいいだけだから」

「ああ」

「あ、ホワイトボード片づけてね」

「……あいよ」

コロコロとホワイトボードを片づける翔流。何もなくなつた闘技場にはエルノアとハルだけ残された。翔流は、その様子を控え席から見守る。

「ハル。これは実践と思ってやっていいのかしら？」

「ああ、問題ない。俺も手加減はしない」

「あら、怖いわね」

刹那、エルノアの身体を薄い魔素の膜が出来上がる。薄黒い魔素の膜。それはエルノアの影となり、エルノアが動くたびに軌跡を描いた。

対するハルは、神素を身体に纏わせていた。エルノア同様、それは膜となり光の軌跡を描く。二人が何らかの術を使ったのは間違いないが、翔流にはそれが何かは分からなかった。

「さてと、始めるか。制限時間は五分でいいか？」

「そうね、どうせ勝負は決まらないのだからそれでいいわ」

「よし、翔流！ 今から五分だ。悪いけど時間図っててくれ」

「あいよ！」

ハルの案に肯定するエルノア。つまりはそれほど拮抗した勝負になるという事だ。

二人の間には結構な距離が空いていた。静寂が闘技場を包む。

「いくぜ！」

静寂を打ち破ったのはハルだ。エルノアに向かって手を翳し、エルノアを軸に円を描く様に疾る。刹那、青色の魔法陣が浮かび上がり無数の氷の矢がエルノアに放たれた。

「まったく、何も考えないのね」

溜息と共に魔素を放出するエルノア。魔素は波紋の様に放出されていく。

「燃やしてあげる！」

刹那、エルノアの言葉に呼応するように炎の輪が出来上がり闘技

場に広がっていく。広がる炎。エルノアを中心に広がる炎はハルの打ち出した氷の矢を呑みこみ消滅させた。そして、その輪はハルをも飲み込もうとしている。全体攻撃と言うのにふさわしい攻撃。

「まったく、えげつない攻撃してくれるじゃねえか」

呟き、地面に手をつけ魔法陣を展開する。茶色い魔法陣。その瞬間、地面が隆起し、ハルの目の前に文字通り壁を作った。壁に阻まれ霧散する炎。

「甘いわよ」

呟かれたエルノアの言葉。その瞬間、エルノアが地面を蹴る。拳を作り、壁に拳を放つ。閃光の様な右ストレートは、ハルを守る壁を簡単に吹き飛ばした。

それを見ていた翔流が思わず目を丸くする。

（エルノアさんは怒らせない様にしよう）

壁を吹き飛ばしたエルノアの姿は翔流に軽くトラウマを与えるには十分すぎるものだった。

「まったく、予想通りの行動してんじゃねえよ」

待ち構えていたようにエルノアに手を翳すハル。展開される黄色い魔法陣。刹那、一筋の閃光がエルノアに走る。エルノアに放たれたのは雷だった。

「そっちもね！」

対抗するように放たれた一筋の魔素。そして、その魔素は雷へと変化していく。ぶつかり合う光と光。衝突した部分は一際強い光を放ち光の筋は消滅した。電気と電気がぶつかりあってショートしたのだ。

「くそっ！」

バックステップで距離を取るハル。だが、その間にも魔法陣の展開は忘れない。発生した緑の魔法陣。そして、そこから疾風が生まれる。

「おら！ 避けれるもんなら避けてみやがれ！」

眼に見えない攻撃がエルノアを襲う。疾風は大気を震撼させ衝撃波へと生まれ変わる。

「見えなければ、消せばいいのよ」

それと同時にエルノアから火球が放たれた。そして、エルノアから少し離れた所でナパームの様に炸裂する。炎によって暖められた空気が上昇気流を作り衝撃波は、それに刈り取られていった。

「そろそろ本気になつたら？ ハルト将補」

からかう様に、床に魔素を放つ。刹那、ハルの足元から無数の棘が出現した。地面を変化させたのである。

「危なっ！」

寸前で棘を躲すハル。だがエルノアは、その隙を見逃さない。

「私も本気でいくわ」

そう言つてハルに向かつて突つ込んでいく。左のジャブから右のストレート。どうやらエルノアの攻撃スタイルはラキートではないらしい。どちらかと言えばボクシングによく似ている。蹴りもある事を考えればキックボクシングの動きが妥当だろう。

「接近戦かよ！」

即座にエルノアの拳を底掌で弾く。だがエルノアの攻撃は止まらない。ローキックから身体の回転を利用して後ろ蹴りへとつないでいく。だが、それだけではなかった。蹴りと同時に放出される魔素が一本の鋭い氷の槍を作る。

「くそつたれ」

毒づきながらバク転で避ける。別に恰好をつけてバク転をしていくわけではない。術を発動させるためだ。両手が地面に着いた瞬間、青い魔法陣が展開された。同時に立ち上る氷の壁。

エルノアの放った氷の槍は氷の壁によつて弾かれる。その氷槍はグルグルと回転して、空中を舞い、ハルの数センチ先に落ちた。

「つと、あぶねえ。つたく、今度はこつちから行くぜ」

そう言つてその氷槍を拾い上げる。長さは大体六尺と言つた所か。正直ハルの身長よりも数センチほど長い。

「いい感じの武器じゃねえか。ちょっと冷たいのが玉に傷だけど」

ヒュンヒュンと氷槍を振りまわすハル。その姿は薙刀を扱う様子に似ていた。

「さあ、行くぜ！」

気合いと共に、地面を蹴る。一瞬にして詰められるエルノアとの距離。そして氷槍が振り下ろされる。だがエルノアもそれは読んでいた。冷静に体を反らし軌道を反らす。

「まだまだ！」

連続で放たれるハルの攻撃。下上げ、横薙ぎ。さまざまな攻撃がエルノアを襲う。だがエルノアは冷静さを欠いてはいない。その一つ一つを丁寧に捌いていった。

（かかった！）

ハルに笑みがこぼれる。

そして、繰り出した突き。その瞬間エルノアの表情が変わる。攻撃の軌道が線から点に変わったのだから当然である。そして、それはハルの作戦でもあった。その為にわざとスイング系の攻撃をし、線の攻撃にエルノアの眼を慣らさせたのだ。

エルノアの胸元に氷槍が疾る。

「ちっ」

小さく毒づき身体を捻る。空を切る氷槍。だがハルはその瞬間を見逃さない。展開される一際大きい青い魔法陣。

「にがさねえよ！」

発動する神術。刹那、地面が凍りついていく。まるでスケートリンク様に凍りつく石畳。勿論、エルノアも例外ではない。氷はエルノアの黒いブーツを呑みこんで行く。

「もらった！」

再び繰り出される突き。凍りついて動けないエルノアにとっては致命的だった。魔素を展開して氷を溶かすにも突くと言う一瞬秒の勝負では明らかに時間が足りない。

勝利を確信するハル。

次の瞬間、ボキっと言う鈍い音が闘技場に響き渡った。

「甘いわよ。ハル」

エルノアが氷槍をへし折ったのだ。空手で言う中段受けの要領で氷の先端を掴みそのまま梃子の原理でへし折ったのだ。そしてその瞬間、翔流の持っていた携帯からアラームが鳴った。

「そこまで！」

闘技場に翔流の声が響く。五分が経過したのだ。

「……くそ、やっぱり五分以内には倒せなかったか！」

「残念ね。倒す所が有効打も無いわよ」

しれつとしたエルノアの言葉に本気で悔しがるハル。

「ぐぞお。……まあいい、翔流。感想は？」

「うん？ ああ。一言で表すとすげえな」

神素と魔素の戦い。それは本当にファンタジー物の映画を見てい
るようだった。そして、改めて感じた事として、この世界では自分
は弱い。カーンの時で実感していた事だが、先ほどの模擬戦を見て
も自分にあるのは空手のみだ。一度戦闘がおければ、一瞬にして自
分は行動する事も叶わなくなるだろう。それが翔流の胸にそれが強
く押し掛かった。

「別にすごい事なんか一つもねえよ。この国の奴らはさっきの動き
は大体出来る。まあ、お前はもう体術はほとんど完成しているんだ。
後は魔素の使い方さえ覚えればこんな動きは簡単にできるようにな
るよ」

「マジか？ 俺、素手で壁なんて割れないぜ。エルノアさんって華
奢な風に見えて怪力だったんだな」

翔流の言葉に喉を潤してたハルが盛大に噴き出した。

「はははは。怪力だってよ、エルノア。よく分析してるじゃないか、
翔流」

大爆笑するハル。翔流の一言はよほどツボだったらしい。

「あのねえ。私を化け物扱いしないでくれる？ 私は怪力でも何で
もないわよ」

「でも、壁を殴って壊したじゃん。俺にはあんな事どうやって
出来ないぜ」

壁を破壊したエルノアの姿を思い出す翔流。間違いなく普通の人間
にはあんな事出来ない。

「そりゃ、普通の状態で壁を殴り飛ばすなんて無理に決まってるわよ。見なかった？ 私の身体の周りに影が出来てたでしょ」

「ああ。ハルにも似たようなのがあったな」

もつともハルの場合は光の軌跡だったが。

「あれは、肉体強化って言って神素や魔素を自分の体の内部に流すの。そうすると身体の細胞が活性化して膨大なエネルギーを得る事が出来るのよ。まあ、持つてる神素、魔素の量で強さも変わってくるんだけどね。翔流君なら私なんて目じゃないわよ。勿論、身体の硬度も変化させる事が出来る。だからあんな事が出来るのよ」

「へえ。じゃあ魔素が操れるようになれば俺にもできるのか？」

「勿論。っていうか肉体強化は基礎だぜ。翔流」

「そうなのか？」

「ああ。それも基礎中の基礎だ。自分の中の神素や魔素に気がつけるようになれば、ほぼ使えるぜ」

「へえ」

「まあ、頑張ってくれとしか言いようがないけどな」

「ああ」

「さて。じゃあ、さっきの模擬選前の捕捉すんぞ」

そう言つてハルはホワイトボードを引っ張り出し、要点を箇条書きしていく。

「模擬戦の前に行ったけど、神素と魔素の違いを説明したよな」

「ああ、自己点火の違いだろ？」

「そう、それだ。これはお前には直接は関係ないかもしれないけど神術と言うのは、構築式の特性のおかげで、誰が使っても同じ形なんだ。つまりAと言う神術を使いたい時、Aと言う構築式を使えば、全員がその術を行使できる。ただし、その必要な分だけの神素が流

し込めなければ神術は発動しない。まあ、簡単に言ってしまうえば汎用性が高く、誰でも同じ術を使えるというわけだ」

「へえ」

「そして、構築式は何度術を行使しても消える事は無い。だから、同じ術を何回も使う事が出来るんだ。まあ、早い話が連射が効く。ほら。おれも氷の矢を連続で出したろ？ ああいう事が出来るんだ」

確かにハルは序盤に氷の矢を無数に出現させていた。

「次に魔素だ。これは完全に魔素を放出し、その放出した魔素にイメージを注ぎこみ発動させるんだ。だから一回一回発動する魔術は異なる物となる。すべては放出する魔素の量と術のイメージを動力源としているから高威力で広範囲なんて魔術を使うやつが多い。エルノアも俺の氷の矢を無効化する時全体に炎の波を放ったろ。あんな攻撃がメインになる。魔術は威力はあるが、一度放つと次に発動するまでに放出、イメージの作業を作らなくてはならない為にラグタイムが発生する。魔術のネックはそこだろうな」

構築式を利用し、安定と速度を重視した神術。魔素を放出し、イメージを具現化させる魔術。どちらにも有利な点もあれば不利な点もある。戦闘になればどちらが有利と言う事は無いのだ。やはり戦闘で一番大事になってくるのは戦術なのだろう。

「まあ、神素と魔素の知識はこんなもんかな。って、そろそろ昼飯じゃねえか。もっと詳しく知りたいならまた教えていく。とりあえず、ここまで知っておけば午後の授業には支障はないはずだ」

「うん、了解」

「まあ、午後はお待ちかねの実践だ。頭ばつか使って疲れたろ」

「まあな」

腕を頭の上で組み身体を伸ばす翔流。確かに、勉強も大事だが翔流にとっては、勉強よりも身体を動かす事の方が望ましいのだ。

「うし。じゃあ、飯いくぞ」

「あいよ」

闘技場を後にする三人。心なしが翔流の足取りは軽くなっていた。

「どうしてこうなった」

呟く翔流。昼食を終えて再び午後の授業に戻り、今は初めての実践である。だがその実践は翔流の思い描いていた物とはかけ離れていた。

「あのねえ。魔素の存在を知らない人間が、いきなり魔素なんて放出できるわけ無いでしょ」

不服そうに座禅を組む翔流にエルノアが呟いた。

「まあ、そうだけどさ」

一応口ではそう言っているが、あまり納得がいていない。今翔流がやっている実践と言うのは単に瞑想に過ぎない。

「いい？ まずは自分の体の中にある魔素を感じるの。その感じる感覚を掴む事から始めていくわよ。はい、眼を閉じて。大きく深呼吸して精神を落ち着かせて」

エルノアの言葉に従い数回大きく深呼吸をする。

「
……」

深く深く息を吸い込み、ゆっくりと吐いていく。繰り返される静かな呼吸。

「じゃあ。次は中丹田に意識を向けてみて」

中丹田とは鳩尾の部分である。ゆっくりと意識を集中させる。

「どう？ そこに何か違う感覚は無いかしら」

「違う感覚がわからない」

ほぼ即答に近い答え。その答えにげんなりするエルノア。

「そっか。じゃあ、手を出して。本当は自分で分かってもらうのが一番だったんだけど」

嘆息するエルノアに手を差し出す。そのまま翔流の手を右手で握るエルノア。

「今から、私の魔素と翔流君の魔素を共鳴させるわ。その共鳴した魔素の感覚を覚えておいて」

「うい」

「じゃあ、行くわよ」

掛け声と共にエルノアの右手から魔素が放出される。そして、その魔素は翔流の身体へと流れ込んでいった。刹那、身体に疾る違和感。それは、体感した事のある違和感だった。

「ぐっ」

鳩尾を中心に何かがある。感覚だけでしか言い表せない何か。それは、自分が覚醒した時にも味わった違和感だった。熱く、鳩尾の所を駆け回る鼓動。恐らくこれが共鳴なのだろう。

「どう？ 何か感じた？」

ゆっくりと離された手と手。それと同時に鳩尾に走る鼓動は鳴りやんだ。

「鳩尾のあたりに、なんか熱いものを感じた。なんか鼓動を打ってるみたいだった」

その言葉を聞いてエルノアとハルが笑みを作る。

「それが魔素だよ。翔流」

「そうなんだ」

「ええ、今度は一人でもそれを感じられるようにさっきの要領でやってみて」

「あい」

静かに眼を閉じ集中していく翔流。大きく息を吸い全神経を鳩尾に集中させる。

「……あれ？」

先ほどの感覚は見つからない。

「まあ、最初はそんなもんかな」

「むう」

「とりあえず、今日はずっとその練習をしてな。と言うよりも、感じるまでは次のステップにいけないからしっかりやれよ」

ハルの言葉に頂垂れる翔流。

「じゃあ、エルノア。時間になったらよろしく頼む。俺は、先に行ってるぜ」

「ええ。分かったわ」

そう言つて、ハルは闘技場を後にした。

「あれ。行っちゃった」

仮にも将補と言う立場の人間だ。いつまでもここにいるのもおかしい話だ。

「さあ、翔流君。ハルは放っておいて練習よ」

「はいはい」

エルノアに促され、再び意識を鳩尾に集中させる翔流。だが、先ほどの熱さや鼓動は一切感じる事が出来なかった。

「はい、お疲れさま」

エルノアの声に瞼を開く。瞳孔に刺さる光が少しだけ眩しかった。瞑想を始めてどれほど時間がたったのだろう。ふと時計を見ると既に五時をさしていた。

「……結局、わからねえまま終わっちまった」

嘆息を漏らす翔流。半日かけて感覚がつかめないというのは少しばかり堪えた様だ。

「別に、そんな簡単にできると思っただけ。私だって自分の魔素を知るには一週間ぐらいかかったもの」

「そうなのか？」

「ええ。だから、気にしない事ね」

差し出された手。つまりは立ち上がれという事だ。

「ああ。そうしとく」

エルノアの手を掴み脚に力を入れる。

「ぐお、身体がバキバキ言ってる。腰痛え。同じ姿勢で居すぎたな」

ほぼ四時間瞑想をしていたのだ。身体が縮こまっているのだ。身体を解す様に関節を曲げていく。

「あ、翔流君。ちょっとこれから街に出るのだけどちょっと付き合ってもらっていいかしら？」

「街に？ べつにいいけど、荷物持ちか何か？」

ふいに思い出される昨日の記憶。昨日二人は、はち切れんばかりに詰まった袋をぶら下げて街を練り歩いたのだ。

「まあ、そんな所かしら。せっかくだから着替えていきましょう」
「あいあい」

「じゃあ、着替えが終わったら部屋に迎えに行くわ」
「ん、了解」

そう言い残して二人は、闘技場を後にした。

『翔流三尉！ ようこそ、アズラベルへ！』

一斉に鳴らされるクラッカー。呼び散る紙テープ。そして、何が起きたかわからないと言った間抜け面を浮かべている翔流。そこにいた面々はアレス、ハル、ラクティ、アズマリア、サイトの五人である。そして、テーブルの上に並べられた料理の数々が美味しそうに湯気を立ち昇らせていた。

「エルノアさん？ これは？ 確か、夕飯を食べるのにこの店に入っただよね」

「ええ、そうよ」

見た限り、この店にはこの五人しかいない。貸し切り状態と言うやつだ。

「何これ？」

「歓迎会よ」

「誰の？」

「翔流君の」

思わず、皆を二度見する。そして、ようやく合点が言った様に右手で頭を押さえた。そして思わず笑みがこぼれる。つまりは自分は嵌められたのだと気がついたからだ。だが別に嫌な気分ではない。

「翔流三尉、主役がそんな場に立ってんなよ。そこに座んなよ」

サイトが空いてる席を指差す。

「ああ」

ラクティが椅子を引きその場に座れとアピールする。

「ありがとう、ラクティ准尉」

「いえいえ」

そう言っで微笑む。相変わらずこの人は紳士だ。

「料理何食べます？ 私、取り分けますよ」

「あ、……料理の名前分かんないから適当に取り分けて」
「了解」

そう言っで皿に料理を取りわけていくアズマリア。気配りの効くいい子なのかもしれない。

「どうよ、翔流。お前がこの国に来てからやたらとドタバタしてたから歓迎会が遅れちまったけどこの国でやっていけそうか？」

右手に葡萄酒の入ったジョッキをそのまま翔流に手渡す。

「ああ。まあ、やっていくしかないんだけどな。ってこれ酒じゃねえか」

「別に、この国は酒の規定は無いからな。別に飲めなくはないんだろ？」

「まあ、な」

翔流の家は結構、放任主義なので、正月ともなればよく親父と酒を酌み交わしていた。今更酒にビビる様な性格は残念ながら持ち合わせていない。

「じゃあ、全員飲み物行きわたったな」

全員が右手に葡萄酒の入ったジョッキを持つ。

「それじゃあ、翔流のこの世界での健闘を祈って！ 乾杯！」

ぶつかり合うジョッキ。小気味な音が店内に響く。

「今日は無礼講だ！ 皆、どんどんやってくれ」

アレスの言葉に全員のテンションが上がる。

「ぶはっ！！ 仕事の後の一杯は最高だね」

サイトがジョッキの中を一気に飲み干し、店員にお代わりを頼む。

「サイトさん。呑むのはいいけど、明日にお酒を残さないでくださいね」

「わあってるって。なあ翔流三尉」

既に出来上がっているのか、それとも本当に階級を忘れた無礼講なのか実際はよく分からないが、とりあえず頷いた。

「大丈夫よ、アズマリア。明日酒臭かったら半殺しにするから」

「それだと、仕事に支障が出ますので、一日みかん箱で過ごしてもらいましょう」

「あら、優しいのね。アズマリアは」

二人の言葉に滝の様な涙を流すサイト。

「よかったじゃないか。サイト曹長。皆に愛されてて」

「嬉しくない。嬉しくないよ、この愛情は！ どうせ愛してくれるならベットの上で愛してくれ！」

そう言っで着ていたシャツを脱ぎ棄てる。上半身裸で決めポーズ。変態一号さんの完成である。

「却下」

「一度死んだ方がいいですね。やっぱり、明日お酒が残ってたら半殺しにしましょう」

「あら、優しいのね。アズマリアは。私は少しでも殺意が湧いたわ」「あゝあ。うちの軍また人が減るのか」

とアレス。

「でも、あれは仕方ねえんじゃない？」

とハル。

「四面楚歌とはこの事ですな。サイト曹長」

とラクティ。

「な、全員敵かよ。いいさ、やけ酒してやるよ」

「ちょ、お前。それ死亡フラグ」

「かまわねえよ、翔流三尉。俺が死んだら、お前にこのポジション譲るぜ」

「いらねえよ！ 全力でお断りだ」

アホなやり取りに笑いが起きる。心地よい空間。どうやら少なくともこのメンバーには自分は歓迎されているのだと心の中で思い、葡萄酒を流し込んだ。

第一章 その五 莫逆の友（前書き）

プチ労災を起こし、始末書に追われアップが大幅に遅れてしまいました。

今週、来週とプチ忙しい週間が続くのでアップが不安定になるかもしれません。

それと、第一章 その三で、完全に直したと思っていたのですが今日読み返してみたら全く直ってなかったので一部修正しました。

第一章 その五 莫逆の友

「馬鹿を言つな！ 翔流三尉は、戦闘要員目的でこの軍に入れたんじゃない！ 魔族の手の内を探るために入れたんだぞ！」

怒声が会議室に響き渡る。黒を基調とした軍服に身を包んだ老若男女がその怒声を静かに聞き入れる。だが、その中で一人口を開く者がいた。

「ハルト将補。今の状況をわかっておられるのですか？ サイランの町とジャイルの村が同時に攻め込まれているですよ。例えばエルノア一佐がどちらかに赴いても、一つ守っている間に、もうひとつが陥落してしまいますぞ。ならば同じ隊にいる浅葱翔流三尉の魔素の力を使うのは道理でありましょう？」

腰まで伸びる真っ白な髪と髭。見るからに老人である。だが、眼鏡から薄らと除く鋭い眼光はそこにいる者すべてを威圧していた。

「ゲルツ大臣よ。そなたの言い分もわかる。だが、その作戦にはまだ無理がある。翔流三尉はまだ魔素のコントロールが出来ていない。まだ魔素を放出する事が出来ないんだ」

堪らず、助勢をするアレス。だがゲルツと呼ばれた老人はその意見に表情を変える事無く口を開く。

「ならば強制的に魔口を開かせればいいでしょう？ 幸いにも彼は不死人だ。腕の一本や二本切った所でまた繋げれば問題ない」

「っ！ ふざけるな！」

再び、会議室に怒声が響く。

「ふざけているのはどちらですか？ この国で魔素を放てる人間はエルノア一佐と浅葱翔流三尉だけなのですぞ？ 神魔混合術が使えなければ魔族の魔素量には到底及ぶ事が出来ない。サイランかジヤイルが陥落すれば戦況も苦しくなるでしょう。大賢者と謳われた貴方がそんな事も分からなくなったのですか？」

「くっ！」

「一人と一国。貴方はどちらを取るおつもりで？」

突き付けられた詰問。言葉が詰まる。

「答えられないようですな」

小さく呟く。その表情は笑みでいた。その笑みは小さく、そしてドス黒い物を感じさせるそんな笑みだった。そして鳴り響く轟音。ゲルツ大臣が机を叩いたのである。

「私情と戦、しかと弁えよ！ 貴方の采配がこの国を左右するのだ！」

返す言葉が見つからない。そして追い打ちをかける様にその言葉は放たれた。

「ハルト将補。浅葱三尉に出兵命令を。出兵は一週間後。彼の力はこの国に貢献してもらう」

ゲルツ大臣はそう言い残し会議室を後にした。ざわめく会議室。その中には、ゲルツ大臣に賛同する声も多数挙げられていた。

「くそっ！……わかってるんだ、そんな事」

戦争と言う逃げようのない事実。翔流がこの国に来て初めての大きな決断が下されようとしていた。

例えばそれが翔流の望まない結果だとしても。

深い呼吸。精神が集中していく。酸素が全身の血管を隈なく駆け回る。

そして、翔流の身体を魔素が包みこんだ。

「……出来た」

静かに告げる声。それを聞いたエルノアが頷く。

「いいわ、そのままを維持して」

エルノアはそう言いながら茶色い魔法陣を地面に向かって発動させた。隆起する石畳。そしてエルノアの目の前に分厚い壁を作りました。

「これを殴ってみて」

「あいよ」

大きく振りかぶり渾身の右ストレートを放つ翔流。まるで発泡スチロールを割る様に簡単に石壁は砕けてしまった。

「完璧じゃない、翔流君」

歓喜するエルノアの声に魔素の循環を止める翔流。

「それにしても、すげえな。肉体強化って言うやつは」

粉々に砕けた石壁の欠片を手に取り翔流が呟く。思いつきり握っても砕けそうにはない。そこにあるのは固い石。身体に魔素を通せば、それすらも簡単に砕く事が出来る。

「別に大した事ないわよ。でも、翔流君がここに来た時に比べれば大きな進歩ね。これは」

確かに目に見てとれる進歩だ。翔流がこの世界に来てから一週間。ようやく魔素を操っているというレベルまでに達したのだ。

「まあ、それなりに苦労したしな」

溜息を洩らす翔流。自分の中の魔素を探すのに三日、そこから魔素の循環イメージを作るのに三日、そしてようやく今日成功したのである。

「試しに念話でもしてみたらどう？　もしかしたら千芹ちゃんと念話出来るかもしれないわよ。ねえ、ハル」

「……え？　うん？　あー、悪い。聞いてなかった」

不意に振られた会話に慌てるハル。

「聞いてないって、あのねえ。翔流君が魔素を操れるようになってきたし、念話が出来る様になったんじゃないかって話」

魔素を操るといふ言葉がハルの胸を締め付ける。今の翔流は、身体の中に魔素を流すぐらいのコントロールは出来るようになってい

るのだ。つまりそれはこの前の様に暴走する事が極めて低いという事だ。

「……ああ、そうだな。もしかしたら出来るんじゃないか？」

二人に悟られない様に明るく話す。自分がこの話を切り出したなら翔流はどんな反応をするのだろう。誰だって戦地なんてに足を運びたくない。ましてや、戦を体験した事のない平和に慣れた人間なのだ。戦地に赴けば翔流は確実に人を殺す事になる。はたして、翔流はその罪悪感に耐える事が出来るのだろうか。

「出来るんじゃないかって簡単に言うけど念話ってどうやるんだよ」
「魔素を身体に循環して喋りたい事を念じてみなさい」
「了解」

再び魔素を身体に循環させる翔流。翔流の身体が魔素に包まれていく。

（千芹！ 聞こえるか、千芹！）

言われたままに念じてみるが返信は無い。

「駄目か？」

「ああ、何のリアクションも無い」

「うーん。翔流の伝達がうまくいっていないのか、千芹の伝達がうまくいっていないのか、いまいち原因がわからんな」

「そもそも、念話なんてあっちの世界ではまずあり得ないしな」

苦笑する幼馴染。やはり、この世界に翔流を連れてくるべきではなかったのだろうか？

自分は簡単に事を決めすぎたのだろうか？

様々な思案が、ハルの枷になっていく。自分は最善だと思う事をした。翔流を監視下に置く為に軍に入れた。戦闘が起きても一番安全な所に配置したはずだった。

だが、それはこの国にとってみれば翔流の存在は道具でしかない。翔流の存在は、使い方次第では最強を誇る道具なのだ。

「まあ……そうだな」

一瞬だが、返信が遅れる。

（言えねえ。……駄目だな。俺）

ゲルツ大臣の言葉が頭をよぎる。

（俺だってわかってるんだよ。ちくしょう、嫌な役ばかり回ってきやがって）

心の中で呟き、久しぶりに自分の役職を呪った。

「どうした、ハル？ 何かあったのか？」

「あ。……いや、なんでもない。ちよつと考え事してたんだ」

どうやら翔流には伝わってしまったらしい。やはり、幼馴染なのだ。ハルの微妙な動作も見逃さなかった。見抜かれて慌ててごまかすハル。

「おいおい。しっかりしてくれよ、ハル」

「ああ、わりい」

「いいよ、別に。それで、話を戻すけど、魔素が使えるようになった」

ても念話が出来ないとかいう可能性は？」

「それは無いわね。現に波長の合う人間同士は念話が出るもの。私とアズマリアがいい例よ。私の神素とアズマリアの神素は構成が似ているの。だから念話もできるし、神素の共有もできるわ」

「それは神素だから出れるって事は？」

「恐らく無いな。言つたら、神素と魔素の違いは自己発火の有無だ。それ以外の構成は同じなんだよ。だから神素に出来て魔素に出来ないという事は無い」

「それに、翔流君の魔核細胞は千芹ちゃんの血液から生まれたものでしょ。波長が合わない筈は無いもの」

「となるとだ。やっぱり考えられる原因は俺が千芹のどっちなんだな」

「そうなるわね」

「……まあ、暇な時に念話を試してみろよ。もしかしたら千芹は受信できてるかもしれない。ただ返し方が分からないだけかもしれないしな」

「ああ。分かった」

「じゃあ、俺はこれから会議だから。エルノア、後よろしく」

「分かったわ」

「じゃあな、翔流」

そう言い残してハルは会議室を出る。

(くそ、言えねえ……)

会議室に向かう足取りが重い。ハルは小さくため息を吐いた。

「そう。ゆっくり、落ち着いて。魔素を手に流すイメージを作るの」

エルノアの言葉に従い、深い呼吸を繰り返す。丹田から腕に魔素が流れる様に意識を集中させる。

「いい？ そしたら、その手に集まった魔素を一気に放出して」
「……」

翔流の手から大量の魔素が放たれる……はずだった。

「あ……ドンマイ」

言葉を失いながら苦笑するエルノア。翔流の手から放出されたのは、か細い数本の黒い魔素の糸だった。例えるなら納豆の糸と言った所か。一応、火をイメージしてみるが蠟燭の炎程度の火が申し訳なさそうに揺らめいていた。

「ぐおおおお。魔口の開き方がいまいちわからねえ！」

悶える翔流。

「でも、ちゃんと魔術は使えてたみたいね」

「ああ、肉体強化が出来るようになってから魔素って言つのがちよつとだけわかるようになってさ、その感覚でやったら出来た」

「ふうん。感覚で出来るなんて大したもんじゃない」

「まあ、結果がこれだけだな」

翔流はそう言って炎を消した。

「まだ翔流君の魔口は広がってないのよ。そのまま使っていけばど

「んどん魔素が放出できるようになるわ」

魔口とは人間が魔素を放出する際に魔素が通るの事を指す。同じく、それが神素だった場合は神口と言う。魔口神口は、汗腺の様に手に無数に放出口がありそこから魔素なり神素を放出するのだが、翔流にとってその体験は今日が初めてなのである。

「焦らないでいいのよ。ゆっくりいきましよう」

「まあ、……そうだな」

昨日、あれから何度か魔素を使い念話を試してみたが、一向に伝わる気配がなかった。その為、翔流の導き出した結論は、魔素をもっと使いこなす事だった。

今行われている訓練は、その為の放出訓練なのだ。

「別に、自分の中にある魔素をコントロールできるようになれば念話は出来ると思うのだけどね。別に無理に魔術まで覚えなくても」
「嫌だ！　だって面白そうじゃないか。ファンタジーだぞ、ファンタジー。俺魔術使えるんだぜって感覚に浸りたいじゃん」
「ファンタジーねえ」

むしろ、この世界では術自体が、日常だからファンタジーも減ったくれないのだが。

刹那、エルノアの携帯が鳴り響く。

「うん？　メール？」

携帯を操作するエルノア。

「……ちよつと。何よ、これ！」

メールを見るなり激怒するエルノア。

「何だ？ どうしたんだ？」

エルノアが怒りだした訳もわからずオロオロする翔流。

「翔流君！ ちょっと来なさい！」

腕を掴まれ引つ張られる。逃げられない様に肉体強化のおまけ付きだ。

「うわっ！ ちょっと、エルノアさん。どうしたんだよ！」

「うるさい！ いいから一緒に来なさい！」

「はい」

あまりの迫力に圧倒される翔流。こんなに怒ったエルノアも見た事がない。

これは、ただ事ではないと判断した翔流は、無難に従う事にした。

勢いよく開かれるドア。エルノアが蹴り飛ばしたのである。

「ハル！ これはいったいどういう事！」

室内に響くエルノアの怒声。エルノアが押し掛けた部屋はハルの部屋だった。

机に指と指を交差させ祈るような姿勢でエルノアに視線を送る。

「すまない、エルノア。そういう事だ」

「そういう事だ、じゃないわよ！ 私はともかく翔流君は関係ないはずでしょ？」

「この国を守るためなんだ！」

一際大きい声。その唇は強く噛み締められていた。

「ちょっと、なんだよ！ いきなり連れてこられて説明も無しか！」

蚊帳の外だった翔流が痺れを切らせた。

「……翔流君。貴方に出兵命令が出たのよ」

「出兵命令？」

「ええ、そうよ。貴方に戦争に参加しろって言う御達しが私の携帯のメールに届いたわけ。差出人はハルト将補。つまりハルよ！」

エルノアの鋭い眼光がハルを捉える。

「翔流君は非戦闘員じゃない。神魔混合術を使いたいのだったら私を使えばいい。どうして翔流君の力が必要になるの？ 理由を説明しなさい、ハル！」

「それは、私が説明しよう」

突如後ろから、発せられた声。振り向くとそこには一人の老人がいた。

「……ゲルツ大臣」

「いま、我が国はサイランの町とジャイルの村が同時に攻め込まれている。相手は総力戦でこの二つの町村を潰しにきている。今のままだとエルノア一佐が出向いた所でどちらかの町村は陥落してしま

う。この二つの町村の陥落が我が国にどれだけの被害を与えるかはわかっていいるだろう、エルノア一佐」

「……でも」

「まさか、そなたも私情を挟むのではあるまいな。これは戦争なのだ。そして浅葱三尉はこの軍にいる以上、駒なのだ」

エルノアと翔流を捉える眼光。

「浅葱三尉。出兵は六日後だ。三尉には、ボルト一尉の率いる第一歩兵神技部隊の援助に回る事だ。分かったな。詳しい詳細は、第二神技研究部隊宛に書類を送る」

そう言つてゲルツ大臣は部屋から出ていった。

取り残された三人。

「……そういう事」

小さく呟く。すべてを理解したエルノア。

「すまない」

「すまないじゃないわよ。分かてるの？ これは戦争なのよ？

翔流君も何か言いなさいよ。貴方、出兵がどんな意味かわかてる？ 貴方、人を殺す事になるかもしれないのよ？」

確かにその通りだ。翔流は死なない。だが、それだけだ。決して心が強いわけではないのだ。

「人を……殺す」

エルノアの言葉に鳥肌が立つ。手に湧き上がる嫌な感覚が蘇る。

肉を裂く感覚。そのあまりにもリアルな感覚に思わず吐き気を催す。

「おい。大丈夫か、翔流！」

真っ青になった顔。全身が小刻みに震えていた。

「……マジなのか。俺が、戦争に」
「ああ」

ハルの作った握りこぶしがギリギリと音を立てる。

「すまない、翔流」
「……」

沈黙。静寂が三人を包んだ。

「わりい。ちょっと気分悪い。ちょっと部屋に戻っていいか？」
「……ああ」

ハルの言葉を聞いてから翔流はハルの部屋を後にした。残された二人。

「やるせないわね」
「……ああ」

「私は翔流君とは別の隊につくのね。翔流君のパートナーは？」
「アズマリアだ」

「……アズマリアか。それなら、少しは安心できるわね」
「……そうだな。それに、翔流達の部隊には俺も参加する」
「そう。なら、大丈夫そうね。……それとさっきは怒ってごめんな

「さいね」

「いや、気にしてない」

「……そう」

「……」

「……」

二人の間に沈黙が走る。

「今回の件本当にやられたぜ。俺の考えが甘かった。ゲルツ大臣とラクア三佐が手を組みやがった」

今回の翔流の推薦。その陰にはゲルツ派とラクア派の面々が目立つ。やはり、翔流の存在は邪魔なのだろう。だが迂闊に消す事は叶わない。ならばその存在を存分に利用しようという魂胆なのだろう。

「犬猿の仲でも手段は選ばないか。私も、自分の持ち場を片づけたらすぐにそっちに向かうわ。私の作戦決行日も翔流君の出撃日と変わらないのしょう？」

「ああ。そうだな。心配させてすまなかった、エルノア」

「いいわよ。その代わり、きちんと翔流君にフォロー入れなさいよ」

エルノアはそう言ってハルの部屋を後にした。

「はあ」

暗い部屋。溜息が洩れる。震える手。

「くそっ！」

カーンを刺した時の感覚。再びリアルに蘇る感覚に翔流はトイレへ駆け込んだ。

翔流は、空手をやっている時はいつも死と言うものを意識していた。運悪く、事故が起きれば相手、もしくは自分が死ぬ事だってあり得るからだ。

だが今回は違う。今回は明確な殺意だ。

人を殺す事の恐怖。自分が殺してしまえばその人物の背負っているものがすべて消えるのだ。果たして自分はその重さにそれが出来るのだろうか。

そして、その重さを何とも思わなくなった時。自分の死への概念と言うのは大きく変わってしまう気がした。

「くそ。想像出来ねえよ」

もう何度毒づいただろう。そして、何度同じ事を考えただろう。いくら考えても想像することができなく、同道巡りだ。

「あー、もう」

ベッドに倒れ込み天井を見上げる。この世界に来る時、少なくとも戦闘と言うものを考えなかった訳ではない。だが実際にそれを目の当たりにしてみると自分の考えていたものは本当に小さかったのだと気がつく。

「くそ」

そして、小さく毒づく。その時だった。

ピンポン

鳴り響くインターホン。

（誰だよ）

正直だるい。誰とも会う気になれない。そんな意識が働き翔流はベッドから動く事は無かった。

「入るぞ、翔流」

ドア越しに聞こえる声。そこで、ドアに鍵をかけ忘れていた事に気がつく。

開くドアの音。そして、次第に大きくなる足音。そして、寝室のドアが開かれる。

「大丈夫か、翔流」

「……ああ」

「そうか」

ハルはそう言って備え付けられていた椅子に腰を下ろした。

「……」

「……」

互いに何か喋るわけでもない。無音の空間。ただただ、時間だけが流れていく。

「……なあ、聞いていいか？」

そんな静寂を最初に打ち破ったのは翔流だった。

「ああ、なんだ？」

「ハルは、人を殺した事はあるのか？」

詰問にも似た質問。少しの静寂を挟みハルが答える。

「ああ、あるよ」

真っ直ぐな眼差しだった。その視線が翔流の視線とぶつかる。

「……そっか」

再び静寂が部屋を支配する。

「俺さ、……千芹を助けるっていう目的だけでこの世界に足を踏み入れた。戦争と言うのもなんとなく曖昧に考えてた。どこかで薄らと線引きしてたんだ。考えが甘すぎたんだよ、俺は」

「……」

「怖いんだ。人を殺す事が。俺が人を殺せば、その人の人生を奪う事になる」

「……」

「……俺には、そんな権利ねえよ」

項垂れる翔流。その声は消え入りそうだった。

「そんなもん、俺にだってねえよ。誰だって人を殺せば罪悪感が付きまとう。けどな、俺達は伊達や酔狂で人を殺めてるわけじゃない。それ以上に守りたいものがあるんだ！ 誰が何と言おうと、例え誰かをこの手で殺めても、その一線を守るために俺は、……俺達は戦ってるんだ」

「……ハル」

「お前が守りたいものって言うのは何だ？ そんなに薄っぺらい物なのか？」

「……っ！ そんな事ねえよ！」

「だったらそれを信じろよ。どんな罪でも背負え。守りたいものがあるんだろ？」

「……」

幼馴染の強い眼差し。目の前の幼馴染はずっとそうやって戦ってきたのだ。

「人殺しに慣れるとはいわねえよ。俺だって戦場に出れば咎に対する罪悪感は今でもあるんだ。重要なのは、自分の戦う意味なんだよ。翔流」

「……戦う意味」

「戦う意味がないっていうんだったら俺がくれてやる！俺がお前の前で先陣切って死んでやるよ。俺を死なせたくなければ全力で俺を護れ。俺に罪を擦り付けろ。お前が一人で罪悪感を背負えないなら俺と一緒に背負ってやるさ」

「……ハル」

「気持ちの整理はそんなに簡単にはつけられないかもしれない。けど、忘れるな！お前には俺がついてる。アレスや、エルノアだっている。お前が罪悪感で心が折れそうになったら支えてくれる仲間はこの国には居るんだ」

「……」

翔流の一筋の涙がこぼれる。

「はは、恰好悪い」

「別に恰好悪くはねえよ」

「そっか。……ありがとうな、ハル」

涙を拭う翔流。自然と笑みがこぼれる。

「かまわねえよ。もともと、巻き込んだのは俺なんだ。こんな事ぐらいはさせてくれよ」

そう言ってハルはひらひらと手を振って翔流の部屋を後にする。

「はは。情けねえな、俺。一人で考え込んで馬鹿みたいだ」

莫逆の友の存在。それが、翔流には嬉しかった。そして翔流は眼を閉じ心に誓う。

「なら、俺はお前が言った通り護ってやる。お前だけじゃない。俺の手が届くすべての人を護り抜いてやる。その為だったら、どんな咎だって背負ってやるよ」

見開かれる眼。これから迎える修羅への決意がそこにあった。

第一章 その五 莫逆の友（後書き）

莫逆の友ってなんかいいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1520k/>

虚無の王

2010年10月14日17時55分発行